

---

# IS ~ 蝉は飛ぶ ~

金剛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS〜蝉は飛ぶ〜

### 【Nコード】

N9091S

### 【作者名】

金剛

### 【あらすじ】

なんやねんこの世界は。こんな世界も、人も、社会もすべてぶっ壊してやりたい。けど…それは後回しや。まずはやることがある。こんな体にしたやつらを全員見つけ出して、ぶっ飛ばしたる！対決や！！

## プロローグ（前書き）

初投稿です。楽しんでくだされば幸いです。

## プロローグ

「とりあえず、全部ムカつくねん。」

人も、物も、何もかも。

「そこに何かがあるだけでイライラするわ。」

目に映るものすべてが。

「なんやねん、この世界は。」

女尊男卑の風潮、それを作り出したISという兵器。

「なんちゆう理不尽や。」

空は青いけど、水はきれいだけれど、人は笑っているけど、世界は今日も平和だけれど。

「全部壊してやりたいけど…まあ、ええ。」

それは後回しだ。まずやるべきことがある。

「復讐や。」

自信を生み出したものに、このような宿命さだまを作り出した奴らに。

「見とれや。」

誰に言うでもなく宣言する。

「絶対にやり遂げたる。」

強い意志を込めて。

「ほな、始めよか。…物語の始まりや。」

……………対決ですよ……………

## プロローグ（後書き）

ちなみに原作知識はあまりありません。また今度小説買って読もう  
と思います。

第1話

入学

↳ why

did

you

go

there

?

(前書き)

とりあえず続けて第1話です。楽しんでくだされば幸いです。

第1話 入学 ｛ why did you go there ｝

学校、それもいわゆる女にしか動かすことのできないISという兵器について学ぶ場所、IS学園。そこに男であるワイがいる。

理由は自分の上司であり親代わりであり所有者であるあの男、「岩西」に言われたから。

「IS学園に行け？」

「ああ、そうだ。今男で初めてISを動かした男が行くって話題になっっているだろう？ ついでだ、お前も動かせるんだから言ってきたらいいじゃねえか。」

カマキリのような顔をした中年のおっさん、岩西がワイにそう言う。

7

「織斑一夏って奴やる。だからなんやっちゅうねん。ワイには関係あらへん。ついに頭に蛆でもわいたか、いやむしろシロアリでもわいてるやる。さっさと病院行ってこいや、アホ西」

「おっ、お前でも今ニュースで話題の人物の名前くらいは知ってるのか。わからねえと思ったからわざわざ名前を言わずにいたのに。意外だなこりゃ、明日は雪でも降るんじゃないか？」

「じゃかましいわアホ西。お前なんか嫌いや、嫌いすぎ。」

「相変わらずだな、お前は。けど、お前に関係ないことはないぜ。」

男でISが動かせるやつが世間的に初めて出たんだ。例の亡霊機業ファンタムタスク

が何もしないはずがねえ。もちろん、あの天才、篠ノ之束だってな。

「そうかもしれないけど、ワイの狙いはそいつらやない。」

…そう、違う。ワイがこの世から消したいのは、壊したいのは、復讐したいのはそいつらやない。

「ああ、そうだ。確かにお前の狙う奴らとは違うが、お前の目的の奴らも出てくるかもしれないねえ。これだけ役者が揃ってるんだ。話題の奴らにお前まで混ざれば、あいつらも尻尾を出してくるんじゃないか？なあ？」

「どうせ出てけーへんわ。今までもそうやったやないか、アホ西が。」

「アホ西アホ西連呼してんじゃないよ、まともな教育も受けてないヒヨッコがよ。…まあいい。どっちにしろIS学園に行くのは決定事項だ。もうそろそろお前もISを動かせるもう一人の男として話題になる。それにもう入学手続きだって済ませてるんだ。後はお前が学園に行つて入試を受ければそれで晴れて入学が決定。よかつたじゃねえか？周りは一人を除いて女ばっかだぜ！？ハーレムを満喫できてさらにお前みたいなやつが学校に行けるなんて夢見てえじゃねえか。うらやましいぜ、この色男！」

カマキリのような顔で、ニヤケ面でそう言う。

「じやかましいわ、エロ西。ってか入学手続きに入試やて！？ワイは聞いとらんぞ！どついうことや、エロ西！」

「アホからエロか、まあ前者はともかくエロは正解だな。この世にエロくない男なんかいねえぜ？男なんてみんな獣さ。」

「うるさいわ！そんなこと話しとんのとちゃう！何でワイが学校なんか行かなあかんねん！」

「事前にお前に言ったら、お前断るだろ。だから勝手にやった。それにお前は俺のところの従業員なんだぜ。上司の命令に従うのが決まりだろ？」

「だからってんなアホな話が…！」

「いいからさっさと行ってこい。お前の目的のためにもこれは必要なことだ。異論は聞かねえ。馬鹿なお前は黙って俺に従え。」

「っ！」

「それに本当に有効な手でもあるんだ。あいつらは今までどんな情報も手掛かりもなかった。だったらこっちから動くのも有効な手段だ。手段にかまつてる暇はないだろ？このまま待っててもタイムリミットでアウトだぜ？…俺からちゃんと指示も出してやる。ほんとに嫌ならなかったことにしてやるが…どうする？」

…意地の悪い奴や。選択肢なんて始めからなくせに。

「……行くわ。行つたらうやないか。どうせそれしかないんやろうが。せやったらしゃあない。行つて来るわ。」

「物分かりがいいじゃねえか。…せいぜい頑張つてこいよ。お前の

ためにも…な。」

「当たり前や、さっさと行ってあいつらとのケリをつけたる。岩西こそサボんなよ。」

「ああ、お前も、な。」

そう言ってワイは通いなれた事務所を出る。天気今日は雨。

今日も体中が痛い。

……やっぱりイライラはおさまらへん。

……

これがワイがこの学園に通うようになった理由。男であることやワイの見た目が変わってるからか、周りの奴らは好奇の目を向けてくるだけで話しかけはしてこない。例の織斑一夏も。

…どうせ話すつもりはあらへん。ワイはただワイの目的のために。

「やり遂げたる。」

……始まりですよ……

## 第1話

入学

↳ why did

you go

there?↳

(後書き

は)

後書き

は)

まだわからないことが多いでしょうがまた後々明らかにしていきます。人物紹介とかも。

では、今日はこの辺で。さようなら。

第2話 一人目 く you will learn “first” 〽 (前書き

二話目です。短いです。

それではどうぞ。

第2話 一人目 You will learn “first”

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

見た目中学生くらいの中のクラスの副担任、山田センセがそう言う。

自己紹介なんて言うことあらへん。面倒くさい。せやから学校なんてもんは嫌いや。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

気付いたら例の男の自己紹介が始まった。何を言えばええのかわからんようで困るとるようや。助けを求めて周りを見回しとる。ワイの方も見おった。

が、関係ない。勝手にしてる。そう思い窓の外を見る。

「以上です」

そう言って終わった。なんや結局名前ゆっただけかいな。

パン！

そんな音が鳴って、織斑の頭が叩かれる。

叩いたのは黒いスーツを着こなし、他を威圧するような眼をもつ女。

「ブリュンヒルデ……」

世界最強ともいえる称号を持つ織斑千冬やった。

叩かれた織斑（弟）はたたいた自分の姉を見て驚いとる。

どうやら岩西が言っていたように自分の姉がこの学園で教師をしていることは知らなかったようだ。

ジャック・クリスピン曰く『10代のうちは知らないことが多いほうが幸せだ』

そう岩西のアホはよく言う。

「げえっ、関羽!?!」

パァン!

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

けどこの状況では知っというほうがよかったに決まってるやろ。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな。」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

「どうやら織斑千冬が担任らしい。まあ問題あらへんやろ。」

……とつとこんな茶番を終わらして目的を果たしたい。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。できない者にはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」

……高圧的にも思える言い方やが、それが織斑千冬の仕事であるというのなら、悪い気分にはならへん。

自分の仕事にプライドを持ってこそ一流だと、岩西には何度も言われた。

「キヤー——！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様にあこがれてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

…周りがやたらとやかましい。

耳に入ってくる音を遮断、聴覚停止。同時に連絡事項等を聞き逃さないためにも、視力の強化を行う。読唇術により、センセらの話は理解できるようにしておく。

…どうやら織斑千冬もこの状況には呆れとるようやった。

そして自分の弟に矛先は向く。自己紹介のことのようやった。

パン！

…また叩かれとる。学校で自分の姉をそう呼べば、そらそうなるわ。

…空気の振動が伝わる。どうやらまた大騒ぎしとるみたいや。織斑一夏が織斑千冬の血縁者で、弟であることがわかったからやるつ…。

あまり騒ぐな、うっとおしい。イライラしてくる…

最後に織斑千冬、めんどいからもう織斑センセでええわ。が、連絡

事項を伝えSHRが終わった。  
とりあえず、もうやかましくなることはないだろうと聴覚を治し、  
視力強化も止める。

…無駄に能力を使った。疲労はあらへんが、イライラはたまる。  
面倒くさい、さっさとこんな生活にケリをつけたい。

「…やっぱりイライラするわ。」

……まだまだ終わりは遠いようだった。

第3話 名前 (Who are you?) (前書き)

3話目です。今日はあと1・2話くらい投稿するかも。

### 第3話 名前 (who are you?)

SHRが終わった後の休み時間。会話する相手もおらへんから、一人座ったまま教室の時計を眺めている。

時計はただ時を刻むだけでいい。機械的に。それは羨ましくもあるが、人であれば機械的に動き生きるなんて死んでいるのと同じや。そうはなりたくはない。

……そもそもワイはその『人』ですらないが。

「お前もそう思わんへんか？織斑一夏」

時計を眺めていると例の男が近づいてきたようなので話しかける。

「えっ、何がだよ？ていうか関西弁？」

「なんでもあらへん。気にせんでええわ。ただの独り言やったさかい。で、何の用や、織斑一夏？」

「一夏でいいよ。そのほうが呼ばれ慣れてるし。二人しかいない男同士だし仲良くしようぜ？」

「さいか。ほな、せやな、ナツって呼ばせてもらっわ。かまへんか？」

「あ、ああ。かまへん…よ?」

「変に関西弁使おうとすんな。それって結構腹立つことやぞ」

「あ、ああ。わかったよ。で、お前は?」

「あん!?!」

「名前だよ、名前。さっきの自己紹介ちゃんと聞けてなくてさ」

「ああ、ワイの名前か…」

…学校に行くということで一応名前は用意してある。ていうか、なかつたらさすがに困る。

名前は今まで呼ばれていたものをもじったもの。苗字は自分でそれらしいのを考えた。

岩西には「いっそ俺と同じ名字で行くか?」なんて言われたが、絶対イヤや。イヤやった。

「……………蝉(ゼン)」

「えっ?」

「佐薙(サナギ)蝉。蝉って書いてゼン。呼ぶのはセミでええわ。そのほうが呼ばれ慣れとる」

「あつ、ああ!よろしくな、蝉!」

織斑一夏と知り合いになった。けど体中が痛い。イライラはおさま

らない。気分も最悪のままや。

「ムカつくわ……」

誰に言うでなく、そうつぶやく。

その後、ナツと少し話したあと、ナツは長い黒髪でポニーテールの女、篠ノ之箒に連れて行かれた。

例の天才の妹らしいが、岩西曰く、大した情報も持ってへんし、剣道の实力はあるようやが、何も知らへん、むしろ被害者のようなやつらしい。注意する必要はあらへんとのこと。

まあどうでもええ。どうせワイには関係あらへん。

教室内にいる奴らが好奇の目で見てくるが、無視する。

体中の感覚を下げることで周りを気にしなくして、机の上に突っ伏せる。授業開始まで少しある。少しやが休もう。どうせ眠れはせえへんが。

授業が始まった。この段階ではまだ初歩の初歩、入学前に渡された参考書に書いてあったことしかやらへんから、問題はあらへん。

その参考書も電話帳並みの厚さがあつた上に岩西のアホが入学3日前に急に渡してきやがったから、覚えるのは面倒やったが。

『どうせお前ならすぐ覚えるから問題はないだろ?』

そう、いつものカマキリみたいな顔で言ってきたとき、ホンマにシバいたろうと思った。が、ギリギリ踏ん張った。腹が立つ。

「ほとんど全部わかりません」

…どうやらナツは参考書を古い電話帳と間違えて捨てたらしく、授業の内容が全く分かってなかったらしい。

パン!

また織斑センセによってナツが叩かれ、参考書が再発行されることが決まり、一週間以内に覚えてくるよう命令されていた。

まあ、ワイには関係あらへん。

そう思い窓の外を見る。

…今日も晴れている。相変わらず気分は悪いまま、イライラも収ま  
れへん。

「面倒クさいわ…」

誰に言ってもなく、そうつぶやく。

授業が終わった後、ナツに泣きつかれ勉強を教えることになった。無視してもよかったんやが、入学初日から孤立していたり問題を起こしたら岩西に何を言われるかわからへん。

表面上だけでもええから友人というものは作っておかへんと後々ツラくなってまう。

……別にナツのためを思ってたのこともやあらへん。

「蝉って意外と勉強できるんだな」

「以外とは余計や。ええからちやつちやと言われたことを覚えるや。ワイも暇やあらへんし、時間は有限なんや。このアホが」

「うっ、悪い。あと、もう少しゆっくり教えてくれないか？さすがに速すぎる」

「ちっ、しゃあないわ。そんなわりちやんと「ちよっと、よろしくて？」よろしくあらへん。帰れ。邪魔すんなアホ。…で、やな、ナツ。ここはこうゆうことになるからやな…」

「ああ、そうなのか。だったらこっちは…」

「ああ、そこはちよっとちやうねん。せやから…」

「なるほど、そういうことか。やっぱり蝉って教えるのうまいぜ。ありがとよ」

「礼なんかいらんわ。さっさと分かるようになれ、アホが」

「いちいちアホって言うなよ。何気に傷つくぜ……」

「何ゆうとんのや、関西じゃむしろアホはほめ言葉や」あなた方っ！！」「…なんやねんな、さっきから」

さっきからナツに勉強教えとる途中やっちゅうんに話しかけてくるアホがおる。

気の強そうな金髪碧眼の縦ロール。岩西にもらった資料の中にあっただセシリア・オルコットっちゅうやつのようにやった。

「まあ！何ですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのでから」「うるさいアホ。さっきからやかましい。やかましすぎやアホ」っな！！」

「いや、流石に可愛いそうだから話くらい聞いてやるうぜ、蝉」

「じゃかましいわ。で、なんや」

肝心の女、セシリア・オルコットは怒りからか少しプルプル震えとる。

「なんなんですの！あなた方はさっきから！」

「えっ、俺も？」

「本来ならば！私のようなものに話しかけられたら！それ相応の態度があるんじゃないかしら！」

ものすごい上から目線で言ってきたよ。面倒くさい奴や。嫌いすぎ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「なッ、わたくしを知らない！？そちらのあなたは？」

「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生やる？」

「なんですの、知っているではありませんか。でしたら……」

「なあ、ところで代表候補生って何だ？」

…周りで聞き耳を立てとった女どもがコケよる。そらそつなるわな。

セシリア・オルコットなんかは怒りで震えとる。

「そんなんも知らんのかいな。ええかげん呆れてくるわ。…説明すんのもメンドイから自分で調べろや」

「教えてくれよ、蝉」

「…端的に言っと『国家代表IS操縦者の、その候補生として選出された人』のことや。まあいわゆるエリートのことや」

「なるほど。確かにそう言われれば単語から想像できるな」

「そう、エリートなのですわ！本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

…ええかげん喋るのもダルなってきた。もう黙ってナツに相手させとじ。

聴覚遮断、動力節減のためにスリープモードモドキにでも入っとこワイの髪は長くて、しかもバンダナで左目は隠してるし右目も角度によっては見えへんような感じ。寝ててもばれへんやろ。

急に肩を叩かれる。どうやらナツのようやった。何かと思い聴覚復旧。

「なんやナツ？」

「いや、俺っていつか…」

「あなた今の話聞いていましたの!？」

「いや、聞いてへんかったけど、なんや？」

眠っていたし聴力も遮断していたので話は何もわからへん。

「蟬は入試どうだったんだ？あのIS動かして戦っちゃっ」

「ああ…。一応勝ったわ」

あの時の入試。

普通に戦おうと思っていざ装備を出そうとしたら、すべての武器（と言っても2種類しかないが）がロックされていたため素手で戦うはめになり、けっこう苦戦した。

岩西の仕業だったらしく、後で文句を言つと

『勝ったんだからいいじゃねえか。それにジャック・クリスピンも言っていただろう？』火事の家から持ち出すのは命より仕事道具だつてな。事前に管理をしっかりとしなかつたお前が悪い。』

…どう見ても岩西のが悪いやろ。あの阿呆。

「そ、そんな！私だけと聞いていましたのに！」

「ドンマイ」

投げやりにそう言ってやる。

「あ、あなた！」

キーンコーンカーンコーン

「っ！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！」

チャイムが鳴ったので、そう言っただけで席に帰っていくセシリア・オルコット。

ぶっちやけ待つ気はあらへん。次の休み時間はずっと寝ていようと思っ。

「なんだったんだ、あいつ？」

「さあ。ってかサッサと席戻ったほうがええぞ、ナツ」

「えっ、なんで？」

「そりゃあ……」

「パァン！」

「お前の姉貴がおるからや」

「そうゆうことは早く言ってくれ……」

こうして次の授業が始まる。

体中が痛い。イライラは増加した。気分も悪い。

「ええ加減疲れてきたわ……………」

一日目はまだ終わらない。

第5話 代表と馬鹿 ｛ c o u l d y o u c h a n g e s o m e o n e ｝

昨日は1日中遊んでいたのので投稿できませんでした。日中は外でBQして夜はモンハンしてました。ガードランスならなんでも狩れる気がする。

まあなんだかんだでどうぞ。

第5話 代表と馬鹿 ｛ c o u l d y o u c h a n g e s o m e o n e ｝

授業の初めに織斑センセがクラス代表者を選出するように言う。

来週のクラス対抗戦や生徒会の会議、委員会への出席なんか仕事となるらしい。

正直やりとうはない。面倒くさい。ガラやない。

けど現実は無常や。

「はいつ！織斑君がいいと思います！」

「だったら佐雑君もいいと思います！」

…ワイの名が挙げられた。

自他推薦は問わないと言ったから断れない。

ナツが抗議しとるが認められそうにはない。ナツに押し付けたいがええ方法は浮かばん。どうにかして代表にならん方法を考えてると異議を唱えだした奴がおった。

…セシリア・オルコットやった。

「待つてください！納得がいきませんわ！そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？実力からいけばわたくしがクラス代表となるのは必然です！」

やりたいなら素直になればええやろ。まあどうせ織斑センセは認めへんやろうけど。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

なぜここで自分らの国をけなし合うかがわからへん。代表の話ちやうかつたんか。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

ワイには国に対する意識なんかあらへんし、そもそも日本人かもわからんからよくわからん感情や。自分の国を馬鹿にされて怒るつちゆうんは。

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

いえ、奴隷にしますわよ。」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？なににせよちようどいいですわ。イギリスの代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

話がまとまったらしい。どうでもいいが、これはやっぱり…

「もちろん、あなたもですわよ！」

…ワイも含まれるらしい。面倒くさいことや。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と佐薙とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。試合順は、そうだな…」

「織斑センセ、ちょっとええやるか？」

「なんだ、佐薙。言ってみろ」

「連載なんかやりとうないし、ワイも一応専用機は持つとります。せやからワイとオルコットはんの試合を先に、せやな、三日後くらいにしてくれまへん？んで、勝ったほうがナツ…織斑と戦うっちゆうことにしてくれまへんやるか？」

周りがワイが専用機を持つとると聞いて驚いとる。本来なら一年の

この時期に専用機を持つことはない。ワイのは1年程前に岩西がどっから持ってきた。

『お前専用のISだけ、感動したか?』

…誰がするか、アホ。

試合まで三日しかないが、準備なんかは必要ないし、代表にならんためのええ方法も思いつくやる。…最悪岩西のアホにでも相談したらええし。

「そうだな。いいだろう。ではそのように、三日後の放課後に同じく第三アリーナで佐薙とオルコットの試合を行い、一週間後にその勝者が織斑と試合だ。いいな」

「はい!」

「……………」

面倒くさいがやるしかない。

「とじろで、」

「なんですの?」

「あんたイギリス人やる？ジャック・クリスピンって知つとるか？」

「？誰ですの？それは？」

…どうやらイギリス人ではないようや。

「知らんのやつたらええわ。気にせんでええ」

試合の日が決まる。相も変わらず体中が痛い。イライラはたまる。ジャック・クリスピンについてもわからへん。

「けつたいなこつちや…」

授業が再開される。

放課後、目の前でナツがくたばつとる。

「うづう……。い、意味がわからん……何でこんなにややこしいんだ……」

「一度読んで理解せえや。わざわざ教えんのもメンドイねん」

「そんなこと言わずに頼むよ…。お前しか頼めるやつがないんだよ…」

「篠ノ之箒とか自分の姉貴がおるやろが。ワイよりそっちに頼めや」

「そうはいつでも…」

「ああ、織斑君、佐薙君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

そう言っつて山田センセが教室に入ってくる。手には書類を持っている。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「俺の部屋、決まってるじゃないじゃなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらっつて話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理やり変更したらしいです。そのため相部屋になってしまうんですけど…」

「はあ…。それで、部屋はわかりましたけど、荷物とかもあるんで一度家に帰っていいですか？」

「あつ、荷物なら」

「私が手配しておいてやった。着替えと携帯の充電器があれば十分

だろう。ありがたく思え」

「はあ…。どうもありがとございます…。ってか、相部屋って蝉と同じ部屋ですか？」

「いや、残念ながら違う。佐雑は聞いていたか？」

織斑センセにそう聞かれる。ナツには悪いが、岩西がもしものときのためにとワイのルームメイトは岩西の知り合いで、ワイの事情についても知つとるやつになつとるらしい。

「ああ、ワイのいとこの奴がおるんで、そいつと一緒にの部屋やって聞いてます」

そうすると、入学前に岩西に言われた。もちろん本当のいところではない。そもそもワイにいとこなんかおらへん。

「そうなのか…。ってことは女子と相部屋!？」

「まあ、ないとは思うが、決して襲うなよ。…もしそんなことしたらどうなるか、わかっているだろうな…」

「あ、ああ。そんなことしねえよ」

「もちろん、佐雑もだぞ」

「…そんなことしますかいな…」

そう言って教室から出て、寮の部屋を目指す。

なんだかんだでルームメイトのことは聞いていたものの会うのは初めてや。

…岩西の奴、変なやつといっしょにしてへんやろな……

寮に向かう。相変わらず体中が痛い。イライラは収まれへん。気分も悪いまま。

「…いい加減疲れるわ……」

…部屋ではゆっくり休もう。そう決めて少し早足になる。

第5話 代表と馬鹿 ｛ c o u l d y o u c h a n g e s o m e o n e ｝

また後でもう1話更新と人物紹介を入れようと思います。

ただまた明日は更新できないかも。

第6話 理解者 〈I believe you〉 (前書き)

はい、6話目です。オリキャラがです。

正直IS要素があまりないような。そのうち出てくる…ハズ

まあ、どうぞ。

## 第6話 理解者 〈I believe you〉

渡された鍵を使い、部屋に入る。中には一人の女がいた。

「お前がルームメイトの奴か？」

座っていた椅子から立ち上がりこちらを見て相手が答える。

「はい、岩西さんから話は聞いています。あなたの部屋が用意されるまで、しばらくの間だけとは思いますがよろしくお願いします。佐雑さん」

そう言つて頭を下げる。見た目は身長160センチ半ば、きれいな黒髪を腰まで伸ばしており、芯の強そうな眼をしている。眼鏡なんかはかけてへんが、委員長や生徒会長なんか似合いそうな堅物っぽい感じがする。

「蝉でええわ。そのほうが呼ばれ慣れとるさかい。で、あんたの名前は？」

立ったままじゃ面倒なのでベッドに腰をかけそう尋ねる。

…ええベットや。自分の部屋に置いとるような安モンとは全然違つ。

「申し遅れました。私の名前は閑野沙耶（カンノサヤ）と言います。できれば沙耶とお呼びください、蝉さん。ちなみにクラスは4組で

す

「そうかい、まあよろしく頼むで、沙耶」

「はい、よろしく願いします」

そう言つてまたぺこりと頭を下げる沙耶。敬語を使われることはなかなかないからなんか気になる。

「敬語やなくてもええよ。もっと砕けて話しよや」

「いえ、それはできません。誠に勝手だとは思いますが私はそういうと決めてありますので」

…やっぱり見た目通り型物のようや。なんでかは知らんがそう決めたのならばあない。

44

「…ならええわい。で、ワイのことについてどこまで知つとるんや？」

「大体のことは一通り。」

あなたが、蝉さんが『人類のあらゆる進化の可能性』をコンセプトに作られた人間であること。

唯一の成功例であること。

あらゆる進化の可能性であるためどのようなものにもなれるが、その副作用のため常に変化する細胞のせいで全身を激痛が襲っていること。

実験されていた研究所を破壊し逃げだしたこと。

あなた以外の被検体はすべて研究中に人あらざるものになってしまったこと。

未だその研究をしていた者の残党がいること。

その残党を追っていること。

見つけ出して復讐すること。

逃げ出した先で岩西さんと出会い情報提供を受ける代わりに仕事を手伝っていること。

元の体に戻るための情報を探していること。

最後に：研究者が安全のために付けた自己崩壊装置のせいで残りの寿命が少ないこと。これらが私の知っていることすべてです」

「ほぼ全部やないかい。岩西のアホが。ベラベラしゃべりやがって。つてかそこまで知ってて、お前は怖くないんかい。ワイは研究所で何人も手にかけてるし、今も下手したら暴走することがあるかもしれんねんぞ？ようこんなんと一緒におれるなあ」

目の前にいる未だ真剣な眼をした沙耶にそう言う。

「お前ではなく、沙耶とお呼びください。…全く怖くないという嘘になります。今も全身を激痛が襲っているため、目に映るものすべてを壊したくなる。そう言っていることも知っています。しかし

…私はそんなことはしないことや、それ以上にあなたがやさしいことや、他人に対する思いやりを持っていることを知っています。だから怖がる必要はないと思っています」

真剣に、こちらの目を見ながらそう言う沙耶。…嘘は言っていないよ。うや。

「んなことあらへん。優しくなんてあらへんわ。何でそんなに信用しとんのや。初対面のはずやる？…わけわからんわ」

「信用ではなく信頼です。あなたがそうだと思っていなくとも、私は知っています。だから…安心してください。私は裏切りません。あなたの味方です。どこまでもお手伝いさせていただきます」

「味方って…」

「岩西さんほどではありませんが、私も情報を扱うことに関しては少し腕に覚えがあります。学校内のことなんかでご相談があれば、いつでも受け付けますよ」

そう言って、ほほ笑む沙耶。

…信用はしてもええかもしれん

素直に信用するとは言えないが、理解者ができたと思うと、気分は悪くない。

学校生活を送るためにも味方は必要だろう。

…たとえば裏切られてもワイやったら大丈夫。きっと大丈夫や。…そう思うことにする。

「そうかい。まあ、よろしゅう頼むわ」

「はい、よろしくお願いします」

「相談受けてばっかでもあれやろし、ワイもなんかあったら聞くだけ聞いたるわ。」

「本当ですか！？じゃあさっそく何ですけど、朝起こしてもらってもいいですか？私、朝は弱くて…」

そんなことくらいなら何も問題はない。どうせまともに寝ることなんかワイにはできへんのやから。

「かまへんで。」

「勉強でわからないところがあったら教えてもらってもいいですか？」

「ああ。」

「部屋に一緒にいる時、いろいろ話をしたり、してもらったりしていいですか？」

「ああ。」

「一緒にお昼食べてもらっていいですか？」

「ああ……ん？」

「たまに一緒に寝てもらってもいいですか？教室まで遊びに行ってもいいですか？私の作ったご飯を食べてもらってもいいですか？むしろお昼は私がお弁当を作るので一緒に食べましょう。それから……」

「チヨイ待ちっ！まだあるんかい？」

「そりゃあ、ありますよ。これからよろしくお願いしますね、蝉さん。」

「……………」

岩西……

お前が選んだルームメイトやから安心やとは思ってたけど、なんでもうこんなに好かれとんねん。わけがわからん。

おまえは何がしたいねんな……

日が暮れてきた。ルームメイトができた。そいつは丁寧やがどこか変な奴やった。

相も変わらず体中が痛い。イライラも収まれへん。けれど少し気分は良くなった。

岩西以外の理解者ができたから。

「…これからどうなんねんな……………」

…よつやく初日が終わる。しかし先はまだまだ長い。

第6話 理解者 (I believe you) (後書き)

メインのオリキャラが全員でしたので人物紹介も載せます。

暇だったら見てください。

## 人物紹介（前書き）

とりあえず適当に作ったものを。

まだ登場していないESの情報など、軽いネタばれがありますがそれでもよろしければどうぞ。

## 人物紹介

名前：佐薙 蝉（サナギ ゼン）

身長：177cm（変更可能、最大は3mほどまで）

体重：73kg（重力変動により軽くしている。本来の体重は500kgほど）

好きな物：（本人いわく）なし。ただし岩西によると猫や犬などの可愛いもの、子供などの無邪気なものは好きらしい

嫌いな物：（本人いわく）人も、物も、世界も、すべて。あと岩西

趣味：ナイフいじり、大暴れ、散歩

見た目：無造作に伸ばした金髪、前髪が目にかかっているのと目元に巻いたバンダナで左目は常に隠れており、右目も角度によっては見えない。イメージキャラクターとしてはMARのナナシ。

特徴：『あらゆる進化の可能性』をコンセプトとして開発された人間。唯一の成功例。細胞が常に変化しようとしているため全身を激痛が襲っている。本能を開放し、ヒト型でいるのをやめたときは全長3mほどで皮膚が黒く、「鬼」のような角が生え、手を増やしたり触手を出して攻撃したり髪の毛を操って攻撃したり、あり得ない方法で攻撃する。強酸もはける（ISだろうと溶かす）。関西弁で喋るのだが、それは研究員によるユーモアとしてそのようなしゃべり方をインプットされたから。キレるとバンダナで隠された『第三の目』が開く。

本作の主人公。自分を作り出した研究者たちへの復讐と元の体に戻ることが目的。名前は芭蕉の「閑さや 岩にしみいる 蝉の声」の蝉の部分から。あと岩西と蝉のコンビの元ネタは井坂幸太郎の「グラスホッパー」、漫画「魔王」から。

名前：岩西

身長：184cm

体重：72kg

好きな物：蝉、ジャック・クリスピン、納豆、金

嫌いな物：理解不能なこと、予定外のこと

趣味：蝉いじり

見た目：カマキリのような顔をし眼鏡をかけた不良中年オヤジ。茶髪で髪は立てている。イメージキャラクターはまんま「魔王」や「Waltz」の岩西。

特徴：蝉の上司にして保護者変わり。蝉は岩西を所有者などと言っているが本人はそんなつもりはない。モデルとなった岩西とは関係がない別人物。本当に蝉のことを心配している。ジャック・クリスピンというところあるロックバンドのメンバーのセリフをよく引用する。本人に戦闘能力はないが、情報収集と操作などが得意な裏方に徹する人。

蝉の相棒？的ポジション。蝉をいじりながらもいろいろ心配したりサポートしたりしている。蝉にも自信のことはあまり教えておらず、謎も多い。ちなみに殺し屋稼業の仲介業者などではなく、ただの便利屋の仲介者。と言っても社員は蝉だけ。ポランティアや子供の遊び相手をさせている。たまにIS関連の非合法研究や人間の改造を行っている研究所を潰しにも行かせる。いつか蝉が元の体に戻って成人したら一緒に酒を飲んで語り合うのが夢。名前は蝉と同じく芭蕉の句の「岩にしみいる」の部分から。

名前：閑野 沙耶（カンノ サヤ）

身長：163cm

体重：47kg

スリーサイズ：85・58・84

好きな物：蝉、ロールケーキ、紅茶、チョコ

嫌いな物：大声、男全般、うるさい女子

趣味：読書、蝉の観察

見た目：長い黒髪のアフターを腰まで伸ばしている。黒眼。スタイルはいい。

特徴：蝉の現在のルームメイト。1年4組在籍。専用機は持っていないし適正もさほどなので代表になったりはしていない。更識簪とは友達。実は中学時代蝉に助けられたことがある。それ以来彼に心酔。岩西に接触し、彼の情報を得、彼を手伝うためにもIS学園に入学した。裏のことはある程度は知っている。準ヒロイン的な立場であり、蝉のことは好きだが付き合えなくてもいいと考えている。むしろ愛人的立場を狙っている。名前の由来は同じく芭蕉の句の「閑さや」から。

蝉専用IS 『蝉』

世代：第二世代

操縦者と機体名が一緒に紛らわしい。岩西がどこからか手に入れてきた機体。世代は第二世代と言っているものの謎が多い。実は第二形態移行済み。機体のカラーは赤茶色。ナイフによる近接格闘戦がメイン。遠距離には自身の特技の一つでもあるノーモーションからのナイフの投擲で対応。さらに機体の腰と背中、翼（翅）には音を増幅させる装置が搭載されているため、自身の能力にもより常人とは比べ物にはならない声を発することで感覚破壊、全方位攻撃、前方への衝撃波発生、対ミサイルトラップの発動が可能。無駄を省いた設計で、腕や脚の装甲は薄い（覆う程度）腰の音波振動増幅装置はそこそこ大きい。翼も蝉を模した感じで6枚あり、飛行のサポート、音の発生・増幅、防御の機能を兼ね備える。そのため結構頑丈。

## 武装

・ナイフ：エネルギーをまとわせて威力を強化できる以外は特に変わった機能はないナイフ。刃渡りは15cmほど。エネルギーをまとわせて長さを伸ばしてブレード状にもできる。9個ほどストックがある。

・川蝉：基本はナイフと同じだが高速振動機能と単一使用能力の使用に必要。1個だけ。

・対ミサイルトラップ「ヒグラシ」：機体にある音波振動増幅装置を展開させることにより、特殊な振動を発生、ミサイルを着弾前に爆破する装置。うまくかかれば発射直後に爆破するため、相手がダメージを負う。耳には注意すれば聞こえる程度の大きさ。常時展開可能だが、効力は30mほど、ほかの音波兵器は使用できなくなる。もちろんエネルギーも消費する。

・ボイスミサイル：声を発生・収束して相手に打ち出す。前方にしか飛ばせないが、見えないし何よりうるさい。高威力だが著しく体力、シールドエネルギーを消費するので最大3回まで。

・バインディングボイス：モンハンの大型モンスターみたいに大声を出す。ティガ的な。音波振動増幅装置により強力になっているので全方向に強力な音と振動を発生させる。耳を防がせて隙を作る役割もできる

他にも音波増幅兵器は「トリコ」に出てくるゼブラみたいな感じでいろいろなことに応用がきくが、自身のエネルギーも使う上、IS

のエネルギーも結構消費するので何度もは使えない。ちなみに人外の蝉が使うから戦闘兵器としてまで使うことができる。他人にはこれほどの威力は出せない

単一使用能力 空蝉

川蝉使用時限定で、現在川蝉がある場所に移動（ワープ）できる。漫画「うえきの法則」のバロンの「自分の位置をナイフの位置にかえる能力」みたいな感じ。エネルギーはさほどかからない。連続移動は三回まで

## 人物紹介（後書き）

こんな感じですよ。またそのうち変更するかもです。

それでは、こんな駄作を読んでくださりありがとうございました。

第7話 秘策と準備 〈 I h a t e “ I w a n n i s h i ” 〉 (前書き)

どうも、こんばんわ。

とりあえず微妙な出来ですが投稿します。それではどうぞ。

第7話 秘策と準備 〈 I h a t e “ I w a n i s h i ” 〉

二日目、昼休み。ナツに篠ノ之箒を紹介されるとともに昼飯に誘われた。

篠ノ之箒は不機嫌そうや。幼馴染とも聞いとるから邪魔にならへんよう断る。

「悪いのう、ナツ。悪いけど用事があるさかい、二人で行ってくれや。」

「そうなのか？」

「ああ、また今度な。」

そう言つて席を立つ。教室を出ようと篠ノ之箒の横を通るときに声かける。

「まあ、せつかくの再開なんやから、しっかり楽しんどき。」

「ッ！」

顔が赤くなつとる。…やっぱりナツに惚れとつたみたいやな。

そのまま教室を出て屋上へ。クラス代表戦のことについて岩西に相談するために。

「…。てな訳なんやけど、どうしたらええ思う？」

『ヒヒツ、やっぱそうだったか。どうせそうなるとは思ってたがこんなにも早く相談の電話が来るとはな』

「ワイが自分一人で判断できんような時に連絡入れるゆうたんはお前やる。なんか考えがあるんやったらサツサと教えい。予想できてたんやったら何かあるやろ」

『男の操縦者だからな。物珍しさで推薦されるってわかってたわけだ。まあ、試合日を先にしたのも案外いい判断だ。どうとでもなる』

「で、肝心なのはどうしたらええねん」

『簡単さ。お前負けるのは嫌だろう、けど2戦するのも勝ってクラス代表になるのも嫌だろう？』

「ああ、嫌や」

『だったら簡単さ。お前、初戦でそのイギリスの代表候補に勝つたらこう言いな。……ってな』

「そんなんでええんかい」

『今まで俺が言ったとおりにして失敗したことがあったか？』

…悔しいがその通りだ。岩西の言う通りに行動すると大抵のことがうまくいく。だがそれはなんだか岩西に操られているみたいで嫌や。

「うっさいわ、アホ」

『まあいい。学校生活頑張れよ、蝉』

「言われんでもやるわアホ」

『そっぴゃあ時間はいいのか？もうそろそろ午後の授業の開始じゃないか？』

そう言われて時計を見る。

ちょうど予鈴もなり、あと五分とあったところだ。

『ジャック・クリスピン曰く『時間を守れば身を守る』急いだよっ  
がいいぜ、蝉』

「うっさい、切るで！」

そう言って電話を切り、急いで教室に戻る。

間に合ったものの、廊下を走ったことを咎められ、織斑センセに叩かれた。

…思った以上に痛い、いつもこれ以上の痛さが体を襲っている。

問題は、ない。

「どづいうことだ」

「いや、どづいうことって言われても……」

放課後、剣道場にてナツと篠ノ之箒の試合があった。

ナツが篠ノ之箒にISの操縦仕方を教えてもらえるように頼んだらこうなったらしい。

…結果はナツの惨敗。受験勉強が忙しかった、中学は三年間帰宅部だったなどと言っとるが、正直そんなによく代表候補生に喧嘩売ったかがわからへん。

「ま、ワイには関係あらへんがな」

そう言っつて、未だ言い争っている二人を見る。

「なおす」

「はい？」

「鍛え直す！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間、私が稽古をつけてやる！」

「え。それはちょっと長いような　ていうかISのことをだな」

「それ以前の問題だっ！大体悔しくないのか。ISならまだしも剣道で男が女に負けるなど」

「そりゃまあカッコ悪いとは思うが…。そっいや、蝉はどうするんだ？三日後に試合するって言ってたけど。」

ナツの奴が急にワイに話を振ってきた。

「ム、そつだな。よければお前にも一緒に稽古をつけてやってもいいが…」

「ワイ剣道なんかやったことないんやけど……まあええわ。軽く体動かしたとか」

そう言つて軽く伸びをしてストレッチをする。

「なんだ、剣道は初めてか。だつたら…」

「いや、どうせ打ち込まれへんやろうから全部よけるさかい打ち込んできて。あと二刀流用の小太刀あらへん？あるなら使わして」

「なんだ？初心者の癖に二刀流を使うのか？」

「二刀流は難しいし、箒は剣道の全国大会の優勝者だからかわすのも難しいぞ？」

そう言いながらも小太刀を渡してくれるナツ。長さは大体60cmくらいでいつも使っているナイフよりだいぶ長い。

「二刀流なんかせえへんよ。ワイの武器がナイフやさかい短いほう

が使いやすいねん。あとよけるのも喧嘩とか実戦には慣れとるから  
何とかなるわ」

そう言っつて防具も付けずに立つ。

「おい、蝉。防具付けるよ」

「いらん。邪魔になるだけや。さっさと始めるで、篠ノ之箒」

「…怪我しても知らないぞ」

そして打ち込んでくる。最初は面。後ろに下がって避ける。

「!?!」

あっさりよけられて驚く篠ノ之箒。さらに挑発するように笑う。

「んなもんじゃいつまでたっても当たらへんわ。本気でやれや。せやないとこつちも運動にならへんわ」

「貴様っ!」

怒ったように攻撃に激しさが増す。それをすべてよける。よけきれへんのは小太刀で受ける。片手でもつとるから振り回しやすい。

「ほら、どんどん来いや」

そう言っつてさらに挑発。イライラ解消のためにも手伝ってもらおう。そう思いどんどん挑発していく。

「どこ狙つとんねん。マジメにやつとんか？」

「っ  
！」

さらに怒る篠ノ之箒をコケにするように大きく跳躍。頭上を飛び去り後ろに降り立つ。

「ま、剣道のルールなんかあんま知らんからな。適当にやらしてもらうで」

さらに打ち込んでくるがすべて避けたりいなしたりしていく。ええ運動になるわ。早いことは早いけど反応できへんことはあらへんし。

神経の強化もすることなくよけ続け、時間は過ぎていく。

「10分以上過ぎとるな。そろそろ疲れたやろし終わるか」

「なめるな！まだやれるぞ！」

そうは言うものの、息も上がっており肩で息をしている。顔も真っ赤。挑発したのがワイとはいえそろそろ終わりしたい。

「もういいだろ、箒。その辺で終われよ」

ナツもそう言うが聞く耳を待たない篠ノ之箒。

…しゃあない。

そう思い、小太刀から手を放して再び面を打ち込んでくる篠ノ之箒の袖を掴み体を反転させ一気に投げる。

柔道の変形袖釣り込み腰。怪我はせえへんよう床に付く前に体を引き上げる。特に袖釣り込みは受け身が取れない技なので気をつけなイカン。

こうして尻餅をつく感じになる篠ノ之箒。

「頭冷えたか？挑発したんは悪かったわ。勘忍な。ワイはもうええから後はナツの稽古でもしたり」

「あ、ああ…」

うなづく篠ノ之箒を見て剣道場を後にしようとする。

「蝉って強いんだな。あんなにかわし続けるし、最後のも柔道だろ？すげーな」

「ワイのことはどうでもええから自分のことをどうにかせいや。せやないとあのイギリス人に負けるで」

「うっ、分かったよ」

そう言って剣道場を後にし、寮の部屋に向かう。久々に体を動かしたらスカッとした。

体中の痛みは治まらないが。

試合の時間が近づく。特に用意はない。いつも通りやれば負けるはずはない。勝った後も岩西の指示通りやれば代表になるのは回避できるとは思わない。

「……帰って休むか。」

「……そして試合の日になる。」

第7話 秘策と準備 〈I hate “Iwanishi”〉 (後書き)

まあこんなもんで。

今回はISでの戦闘です。描写がうまくいっているのかわからな  
い…

第8話 決闘 ～knock down blue～ (前書き)

初のISでの戦闘です。描写がうまくいっているかわからない…

第8話 決闘 ｛ knock down blue ｝

「完膚なきまでに叩き潰してください」

「ああ」

「二度と蝉さんに逆らう気が起きないくらいにボコボコにしてください」

「おー」

「いやもうむしろ人として生まれたことを後悔させるくらいに…」

セシリア・オルコットとの試合当日。

軽くストレッチをして試合の準備をしているワイに沙耶がそう言う。  
…何でここまでキレとんねん。試合をするようになった経緯を話してからずっとこの調子や。ワイも常にイライラしてるとはいえ、なんでこんなにも怒ってんねん。ここまで好かれるようなきっかけがあつたやろうか？

「聞いていますか？蝉さん？」

「おう、聞いたとるわ」

「ならいいんですが…。そろそろ試合の時間ですね。私は観客席から応援しています。頑張ってくださいね」

「言われずとも、や」

「お〜い、蝉〜」

手を振りながらナツが篠ノ之箒を連れてピットに入ってくる。

「では私はこれで」

ナツと入れ替わるように沙耶は出ていく。ナツの横を通り抜けそのまま外へ。

…応援するゆうてたし、無様な試合は見せられへん。岩西もどこかでこの試合を見ているかもしれんし、手を抜く気は全くない。

「蝉、今の誰だよ?」

「ワイのルームメイトや。で、何しに来たんやナツ」

「いや、蝉の応援に。頑張れよ、蝉」

「んなことお前にゆわれんでもやるわ。お前もあいつと試合するかもしれんのやからしっかり見とけや」

「俺は蝉が勝つって信じてるよ」

「…まあええわい。とつとと終わらせてくるわ」

そう言って自身のIS『蝉』を展開する。…機体の状態は好調、適合率も悪くない、武装の展開が可能かどうかもチェックしておく。…すべて問題なし。

「それが蝉のISSか？」

「ああ、一応第二世代ISS『蝉』。自分の名前とこっちゃんになるから面倒やわ。ま、もうワイはいくで」

「頑張れよ！」

「貴様がどんなものか見ててやる。」

ナツと篠ノ之箒にそう言われる。

「まあ見とけや。あと耳ふさぐ準備しとき」

「耳？」

「ワイは蝉やからな」

そう言っつてピットから飛び立つ。目の前には空が広がっている。

…この飛び立つ瞬間ゆうもんは気持ちがいい。ひと暴れしてこのイライラを取り払おう。

「あら、逃げずに来ましたのね。褒めて差し上げますわ」

「……………」

目の前にいる青いIS『ブルー・ティアーズ』を身にまとったセシリア・オルコットがそう言う。

対するワイは何も答えへん。攻撃用に声は取っておく。…大体五分ほど。攻撃に必要な声をチャージするまでは。

「今ここで謝るといふのならば許してあげないこともなくてよ」

「……………」

「…無視、ですか。いいですわ、そこまで私を怒らせたいなら…」

『セシリア・オルコット対佐藤。試合、開始！』

「その身で償いなさい！」

セシリア・オルコットがそう言って開始と同時にライフルで攻撃してくる。初期位置から動いて回避。…まずは回避に専念。声をためて攻撃に移れるように準備する。

「うまくかわしましたわね。ですが、いつまでこのブルー・ティアーズの攻撃をよけ続けられますかしら!？」

「……………」

攻撃に移るまで約五分ほど。かわし続ける。

「佐薙が黙って回避に専念しているな…。攻撃に移るまでは少し時間がかかりそうだ」

ピットでリアルモニターを見ていた織斑千冬がそう言う。

「何で蝉は攻撃しようとしななんだ？つてか千冬姉は蝉の試合見たことがあるのか？」

パン！

「…織斑先生と呼べ。そうだな、一度だけではあるが見たことがある。入試の試験官が山田君で、私はその試合を監督していたからな」

「どんなだった？」

「そうだな。一言で言うなら…凄まじかった」

「凄まじい？」

「うう、もう蝉君とは試合はしたくないです…」

そう涙目でいう山田麻耶。蝉との試合が軽くトラウマになっているようだった。

「結局具体的には？」

「見ていればわかる。あと2、3分もすれば攻撃に移るだろう」

「そうなのか…」

そう言っただけモニターに目を戻す織斑一夏。画面には掠ることもあるが4機のビットからの攻撃すべてをかわす蝉が映し出されていた。

「くっ！なぜ当たりませんの！」

「……………」

相変わらず回避に専念する自分。声がたまるまであと一分ちよいくらい。

「あなた！勝つ気はありませんの！？よけているだけでは勝てませんわよ？」

「……………」

挑発してくるが聞く気はない。もう一分もすれば攻撃に入る。暴れるのはそれからや。

「いい加減当たりなさい！」

4機のビットとライフルで攻撃してくる。攻撃方法はこの二つと奥の手のミサイルだけやと事前に岩西からの情報で聞いていたから、イメージ通りに回避。神経の反応を上げればすべてよけることもできるが今回は使わない。そのままの速度でかわしていき、それでもかわせないものは翼状に展開されている6枚の『翅』で防御する。エネルギーが少し削られるが問題はない。…あと30秒ほど。

「ちょこまかと…。うっとおしいですわ！もう！」

ビットの操作が荒くなるが攻撃速度が増す。かわしづらくなってきた…。あと少し…。

「今ですわ！」

ライフルで狙い撃ってくるセシリア・オルコット。

…溜まった！

瞬時に『蝉』に装備されているナイフを展開。エネルギーをまとわせて威力の強化をし、ライフルの光と相殺させる。相殺が終わると同時に相手にナイフを投げつける。

「！くっ！」

とっさにかわすセシリア・オルコット。

「やっと攻撃する気になりましたか。ですが、勝つのは私ですわ！」

「調子のんなや、アホが。…溜まったで。もう攻撃なんかさせへんわ！」

攻撃に移る。一気に空気を吸い込み、声を出す準備をする。

「…！来るぞ！全員耳をふさげ！」

そう織斑千冬が叫ぶ。

「えっ、耳ふさげって…！」

困惑する一夏を尻目に山田麻耶と篠ノ之箒は耳をふさぐ。

「…攻撃に移るようですね。そろそろ耳栓をしておきましょう」

そう言っただけで観客席で試合を観戦していた沙耶が耳栓をつける。手には蝉の勇士を記録するためのビデオとカメラが握られている。隣には同じクラスの友人である更識簪が座っている。

「え、耳栓ってなんで？」

そう聞くが、返事はない。蝉の姿を見てうっとりと恍惚の表情をしている沙耶。耳栓もしているのでこれ以上聞いても無駄だと判断し試合に目を戻す。

そして『声』が発せられる。

「 ! ! ! ! ! 」

声とはいえないような大音量の音を発生させる。ただでさえ人外でもあるワイが時間をためてまで発する声。まともに聞けば感覚自体が狂わされるやろつ。

「 ~~~~~ ! ? 」

目の前にいるセシリア・オルコットも例外ではなかったようだ。耳をふさごうとしているが、その隙を見逃さず接近する。

「 ツー ! 」

接近しているのに気付き、ビットやライフルで攻撃しようとしてくるが、それに合わせてもう一度叫ぶ。今度は攻撃にも転化する。

「 ! ! ! ! ! 」

「 きゃっ ! ? 」

声に合わせて音波増幅兵器により強化した振動と空気の弾がセシリア・オルコットを襲う。ひるんだ隙にさらに接近。ナイフを展開。攻撃準備のためにもエネルギーをまとわせる。

かなりの接近を許し、焦るセシリア・オルコット。ただでさえでかい声で気が動転しているところに追い打ちをかけるように近づく。あわてて隠し兵器でもあるスカートの下の、もう二機のブルー・テイアーズのミサイルを発射しようとする。しかしそれを許すつもりはない。

対ミサイル迎撃トラップ、『ヒグラシ』、発動。

瞬時に展開される特殊な振動が発せられるフィールドにより、ブル  
ー・ティアーズのミサイルは発射と同時に自身の近くで爆発し、操  
縦者に襲い掛かる。

何が起こったかわからないであろうセシリア・オルコットと交差す  
るようにナイフを振りぬく。

「南無三！！これでしまいやー！」

ナイフで切りつけ、試合終了のベルが鳴る。

『試合終了。勝者、佐薙 雛』

デビュー戦としては時間もかかりすぎて今一やった気もするが、ま  
あええやる。

久しぶりにスツとした気持ちになり、ピットに戻る。

イライラは少し晴れた。体中は痛い。けど勝った。その事実で少し  
気分を良くする。

「やっぱり暴れると気持ちええわ……」

……あとはさっさと帰って休もう。少し、ほんの少しだが疲れたから。

第8話 決闘 くnock down blueーく (後書き)

こんなもんです。何か微妙。

では、読んでくださりありがとうございました。

第9話 事後処理 I don't want to do a trouble

9話目です。短いなんか適當。

でもいいや。どうぞ。

「さすが蝉さんです！見事な戦いでした！もうあまりにも格好よすぎるので何度か倒れそうに…」

ピットに戻ると沙耶がいた。恍惚の表情をして悶えながら延々としゃべつとる。あ、鼻血が垂れて来とる。

…ホンマにコイツがわからん……

「やはりビデオを持ってきてきて正解でした！あんなに格好いい蝉さんが撮れたんですもの！戦っている時の蝉さんは強くて格好良くて凛々しくて素敵でした！」

とりあえずそうやって騒いでいる沙耶の横を通り抜けピットを出ていく。自分の世界に浸っている沙耶は気付かへん。

試合で声をそこそことはいえ使ったから一時的に声が出なくなつとる。何か飲み物でも買いに行こう…

「おーい、蝉〜」

ピットを出るとそうナツが話しかけてきた。後ろに織斑センセともおる。

「すげーな、蝉！強いじゃないか。」

そう言っつて背中を叩いてくるナツ。試合後の奴を労わるうつつちゆう気持ちはないんか。

「だがやりすぎだ馬鹿者。少しは観戦している者の気持ちも考えろ。いきなりあんな音を出されたらたまらんぞ。」

「確かにあれはうるさかった…」

「うっ。鼓膜が破れるかと思いました…」

そうは言うが、あれは立派なワイの武器や。あれを使わんでも戦えることは戦えるが、そうすると蝉っぼさがなくなっつてまっつ。

（まあ、そない言わんといってください。あれがワイの戦法なんですから…）

かすれてまともじゃべれないがそう言う。

「あれ、蝉。声が出てないぞ？どうしたんだ？」

（戦闘で音波振動増幅兵器使った反動や。あれはでかい声を自分で出したようなもんやからな。）

「大丈夫かよ。っつかあれっつて蝉の声だったのかよ！？スゲーでかかったぜ。」

（まあ、そういう武装やから。ところで織斑センセ、話があるんで

すがええですか？)

「ふむ、何だ。聞こう。」

(「ここじゃちょっとあれなんで向こうで…。ナツは先行つといて。)

「え？なんでだ？」

(ええから。ほら、篠ノ之箒、ナツ連れてって。)

「ああ。ほら行くぞ一夏。お前も試合をするんだから今から特訓だ。今のままでは佐薙には勝てんぞ。」

「…そうだな。うっし、おれも特訓頑張るか。じゃあな、蝉。」

そう言ってナツと別れる。

「で、話とは何だ、佐薙。」

そう言われて岩西の指示通りに話す

「と、言うわけで。次のクラス代表決定戦は織斑君とセシリアさんになりました。二人とも頑張ってくださいね。」

「「なんでだよ」(！?)」

ワイとセシリア・オルコットの試合の次の日。朝のSHRで山田セ

ンセがそう言う。それに対して突っ込む二人。タイミングもあつとるしなんだかんだで仲ええんとちゃうか？

「昨日の試合コイツ負けたじゃないですか！何で蝉との試合じゃないんですか！？」

「こいつとは何ですか！確かに負けてしまいましたけど…。なんですの、あなた！わたくしを馬鹿にしているんですの！？」

「パァン！パァン！」

「…落ち着けお前たち。」

織斑センセの出席簿での攻撃が二人に飛ぶ。

「そうはいつでも千冬姉…！」

「パァン！」

「織斑先生だ。何度言ったらわかる。」

「はい…織斑先生…！」

そうやってまた叩かれているナツ。学習能力ないんかい。

「理由は簡単だ。佐薙が辞退を申し出た。よってオルコットが佐薙の代わりに試合に出ることになった。…それだけだ。」

そう、あの時岩西に言われたのは、初戦で勝った後に辞退を申し出る。それだけやった。代表に選ばれるのに拒否権はないが、辞退は認めないと言われていなかった。

実際に辞退の理由として、岩西の持つてくる仕事、まあ家庭の事情で何度か授業や学校を抜けることがあるかもしれないということから代表には不資格と言ひ、それが認められた。

ホンマに岩西の指示通りにするとなぜかうまくいく。ムカつくわ。

「けどこいつ蟬に負けたんだし、戦う必要あるのか？」

「さっきから負けた負けたってうるさいですわ！あの時はたまたま油断していただけですわ！それにこいつってまた言いましたわね！わたくしはセシリア・オルコットですわ！」

「いいじゃねーか、そんなの。ていうか負けたのは事実だろ？」

「っ！ですが、あなたが勝ったわけではないでしょうが！あなたもわたくしに勝てるとおっしゃるのですか！？」

「ああ、勝つてやるぞ。」

「なんですって〜！」

「パァン！パァン！」

「だから落ち着けと言っている、貴様ら。とにかくこれは決定事項

だ。つべこべ言わず決着は試合で付ける。いいな。」

「はい……」

叩かれて素直に従う二人。これで何とかワイのクラス代表になる可能性はなくなった。ようやく問題が解決して肩の荷が下りたような気になる。

「それでは授業を始める。教科書を開け。今日は……」

問題がようやく解決した。今日も外は晴れ。相変わらず体中が痛い。イライラも収まらない。だが当分は苦労しなくてもよさそうや。

「ま、後は傍観にでも回るか……」

そうつぶやき、教科書に目をやる。

第9話 事後処理 I don't want to do a trouble

こんなもんです。適当だし短いしごめんなさい。

第10話 疑問 (the flag doesn't stand) (前書き)

最近忙しいというか…

昨日住んでいるマンションのオートロックが壊れて1時間ほど外に  
放置されていました。もう泣きそう・・・

第10話 疑問 〈the flag doesn't stand〉

「この前は申し訳ありませんでした。」

そう言っつて頭を下げるセシリア・オルコット。どうやらこの前の試合でワイに負けたことで、試合前の態度を反省し、謝りに来たらしい。

「別に気にしてへんからええよ。」

「ですがわたくしはあなたやあなたの国を馬鹿にしてしまっつて…」

「別にワイ自身馬鹿にされてもかめへんし、ワイは別にこの国出身とちゃうからな。」

「そうでしたの？」

「ああ、せやから謝るんやっつたらナツにでも「それは嫌ですわ!」  
そうかい…」

「あの猿は私の祖国を侮辱したのですわよ!許せるわけがありませんわ!」

やっぱワイにはわからん感情やわ。意識を持った時にはようわからん研究所やっつたし、日本にいて、日本の名前をもつとるんもたまたまやから属国意識なんてまるであらへん。

「そうかい。話がそれだけやったらもうええか？疲れとるから休みたいねん…」

昨日の夜、部屋に帰ってベットに倒れ休んどいたら沙耶が暴走し始めたため全然休まれへんかった。

曰く、

『疲れてらっしゃるでしょうからマッサージでも…』

『何も食わずに寝たら体に悪いですよ？私が何か力の付くものを…』

『体を動かすのもしんどいでしょうから私が食べさせて…。え？いらない？だったら体をふいてさしあげま…。やだ、もうっ！遠慮しなくてもいいんですよ、私は蝉さんのためにいるんですから。』

拳句の果てに、『今から今日撮影した蝉さんの勇士を編集しますの  
で何か御用がありましたら遠慮なく言ってくださいね。』と言って  
ビデオの編集を始めた。

…今までいろんな人間を見てきたはずやがあれほど怖いと思ったやつはおらへん。ホンマに沙耶って奴がわからへん。

そんなわけでそんな沙耶が気になりゆっくり休む暇があらへんかった。体力的には問題はあらへんが、最近の環境の変わり様に精神がだいぶ疲れとる。今は休みたい。

「その、すいませんが一つお願いがありますの。」

「なんちゃ？」

「わたくしの特訓を手伝ってくださいませんか？昨日の試合でわたくしは自分がまだまだ甘いと知りました。ですので…」

「おーい、蝉ー」

ナツがそう言って話に入ってきた。

「なんやねんな。」

「俺にISの操縦を教えてくださいませんか？幕に特訓を手伝ってもらってるんだけど、剣道の練習しかしてなくてさ。実際にISを動かして特訓したいんだけど。」

「ちょっとあなた！今はわたくしが佐雑さんに頼んでいましたのよ！？あなたは引っ込んでいてくださいな！」

「なんだよ、別にいいじゃないか。エリートなんだつたら教わる必要ないだろ？な、いいだろ、蝉？」

「私と特訓してくださいますわよね？佐雑さん？」

そう言って目の前で争う二人。めんどくさいゆうてんのになんやこいつらは…。

「悪いけど両方お断りや。ワイはどっちにも付く気はあらへん。」

「そんなこと言わずに頼むよ、蝉ー」

「こんな猿相手にするより私の特訓に付き合ってくださいればあなた自身の特訓になりますわよ。」

「なんだよ!」

「なんですの!」

そう言うてにらみ合う二人。あほらし…。休ませてくれや…。

「どっちも嫌やて。それからな…」

「パン!パン!」

「…席に着けお前たち」

「はい…」

「織斑センセ来とるで。」

頭を叩かれて去っていく二人。ええかげん学習せいや。

「そうか、クラス代表になるのは免れたか。」

放課後、屋上にて。岩西に報告をしている。策を貰った手前、今回

のことは一応連絡を入れるように言われていた。

「ああ、気に食わんがお前のゆう通りやったわ。辞退するゆうたらあっさり受け入れられたわ。」

『だろうな。織斑千冬だつて人の姉だ。下手にお前みたいなやつと当てるより、あのイギリスの代表候補と試合させるほうがいいと思つたんだろう。いい経験になるだろうしな。それに、お前に代表に対するやる気がないことも分かつていたんだろう。それならやる気のある代表候補や自分の弟にやらせたほうがいいと思つたんだろうな。』

「そう言うもんか…」

なんだかんだで岩西は頭が回る。やっぱり気に食わん。

『ただ、一つお前からの報告で気になることがあるな…』

「なんや?」

『フラグだよ。』

「は?」

何を言い出したんやコイツは。やっぱり頭にシロアリでもわいとんとちやうか。

『フラグだよ!セシリア・オルコットの生い立ちは知ってるだろう?あいつは自分の親父が腰抜けだったから男に対していい感情を持

ってなかったが、その男であるお前に負けたんだ。惚れてもおかしくないと思わねえか！？今までの自分の常識が崩れるようなことが起こったんだぜ？だったら…』

「切るぞ阿呆。」

そう言って電話を切る。やっぱり岩西はたまにわけわからんことを言  
いよる。今回もそうや。

ただ、あいつはどこからセシリア・オルコットの情報を手に入れて来たんやろか。試合前に沙耶経由で送られてきた情報はかなり詳細なものだった。それこそ、こんなもんが流出したら国際的な問題になるくらいの。

「相変わらずようわからん奴やわ…」

まあいい。何かあれば全部倒せばいいだけや。それが岩西でも変わらへん。

「大丈夫や。問題あらへん。」

そう言って屋上を後にする。



第10話 疑問 (the flag doesn't stand) (後書き)

これからまたレポートの作成に入らなくてはいけません…

ストックはあるけど更新は遅れるかもです。

第11話 代表戦 ｛ another fight ｝

時間はあっという間に過ぎ、ナツとセシリア・オルコットの試合の日になった。

「沙耶はいかんのか？」

「せっかくですが、行く意味がありませんので」

一応沙耶の声をかけていこうと思ったが、興味がないらしく断られた。

「せやけど自分、新聞部やなかったん？」

「蝉さん以外を取材する気はありません」

…はつきりと言い切った。よほど興味がないらしい。

「ですから、また今度取材させてくださいね。私は一応合気道部にも入っているので今日はそっちに行こうと思っています。また今度誘ってくださいね」

「そうか。ワイもナツに誘われたからな。めんどいけど行ってくるわ」

「やっぱり蝉さんは優しいですね」

「んなわけあるかい」

そう言って沙耶と別れる。目指すは第三アリーナ。

「お、蝉じゃんか」

ピットに向かう途中の廊下に夏と篠ノ之箒がいた。

「お前が呼んだやからやないかい。さっさと終わらせろや」

「ああ、頑張るよ。ただ、ちょっとくらいISの操縦について教えてくれてもよかったじゃねえか。結局箒は剣道しか教えてくれなかったし蝉は勉強しか見てくれなかったし」

「だからあれはお前の専用機が来てなかったから…！」

そう言って言い合いを始める二人。めんどくさい。

「痴話喧嘩はええから試合前やったら集中でもしとけや」

「ちっ、痴話喧嘩だどっ！ちっ違つぞ佐薙！私はただ同門の不出来を…！」

「そうだな、ちょっと瞑想でもしとくか」

篠ノ之箒は真っ赤になって否定するが、ナツは痴話喧嘩の部分は完全にスルーしとる。ナツのほうは目をつむって集中力を高め始めた。

すると廊下の向こう側から織斑センセと山田センセが来た。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

「山田先生。どうしたんですか？そんなに慌てて」

「あのですねっ、来ましたっ！織斑君の専用IS！」

「へ？」

そう言っつてほうけるナツ。山田センセも律儀に走っつてまで伝えに来たねんな。

「ピットに搬入してあります。時間がありませんので急いでくださいー！」

「え、あの……」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せる。一夏」

「え？え？なん……」

「」「早く！」

そう言われて連れていかれるナツ。

「まあナツ、頑張りや。ワイはもう観客席行くさかい。」

ピットにドナドナされていくナツに向かってそう言う。ワイも観客席に行こうとするが、

「佐薙、お前もピットに來い。クラス代表戦を辞退したとはいえ関わっていたんだ。この試合に対するお前の評価も聞きたい」

そう織斑センセに言われる。とりあえずトイレ行ってからと答えていったん去る。

実はナツの専用IS、『白式』についてはもう知っている。昨日の夜、岩西からまた沙耶を通じてデータが送られてきた。

篠ノ之束が開発した第四世代ISで、装備は『雪片式型』のみ。けど、第一次形態から単一使用能力である『零落白夜』が使用可能。エネルギー無効化の能力が付くが燃費は悪い、らしい。攻撃に特化した機体とのこと。

ホンマに毎回思うが、岩西はこの情報をどこから手に入れてくんねん。聞いたところでいつものクリスピンのセリフで返されるだけ。ム力つくわ…。

軽く時間をつぶしてピットに向かう。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

そんなことをセシリア・オルコットが言って試合が始まる。

試合はセシリア・オルコットが優勢。ナツは操縦の経験が圧倒的に不足しとるうえ、相手はワイに負けたこともあって油断はない。

これはナツが勝つんは無理か…。

そう思うがエネルギーの残量が残りわずかになったところでナツが反撃に転じる。ピットでの攻撃パターンが読めてきたみたいやが、ワイの試合で気付かんかったんかい…

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からの癖だ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「へええ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいことまで分かるなんて」

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？照れているんですねー？」

そう言って織斑センセをからかう山田センセ。ふむ…

「弟の昔からの癖を知っている織斑センセとかけて甲羅の中に閉じこもった亀ととく」

「？その心は？」

「どちらも見まもって（身、守って）います」

「おー、うまいですねえ。篠ノ之さん、座布団を…」

「センセが行ったらええですよん。山田なんですから」

「あっ、そうですね。私だったら山田君に」

山田センセの声がそこで止まる。

「佐薙、山田先生…」

ガツと頭を織斑センセにつかまれる、ワイと山田センセ。そのまま力を入れられ頭を握りつぶしに来られる。

「私はからかわれるのが嫌いだ！」

ギリギリと音が聞こえそうな威力のアイアンクロー。山田センセが悲鳴を上げとる。

このくらいの痛みやったら問題はない。耐えられる。

「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから放して…。とうか佐藤君はなんで無反応なんですか！？痛くないんですか！？」

「痛いに決まっていますやん」

「じゃあなんでそんなに平然と…。すいません！痛いです！限界です放してください〜〜！」

試合は進んでナツが第一形態移行（ファーストシフト）した。これで零落白夜が発動できるようになったからうまくいけば勝てるかもしれないへん。そんなとき、

ピリリリリリリ……

ワイの携帯が鳴った。岩西から電話がかかってきたみたいや。

「佐藤、携帯は切っておけ」

「すんまへん、ちょっと待ってください」

そう言って電話に出る。

なんや岩西、こんなタイミングでかけてくんや。そんなことを言おうと思っただけに出たが、それは岩西からの言葉で飛んだ。

「先生、すんません！急用ができました！」

そう言って急いでピットから出ていく。

「おいつ、佐薙!」「佐薙君!？」

ピットを抜けると急いで走りだす。向かうのは校舎の外。ワイが追ってる奴らの情報が見つかったらしい。人にぶつからないよう急いで走っていく。

「待つとれや……!」

……………対決ですよ。

第11話 代表戦 ｛another fight｝ (後書き)

違うんです。途中のうまくも面白くもないあの謎かけはただ、山田先生に山田君をやらせたかっただけで……

ホントにごめんなさい！

## 第12話 突撃 ｛go ahead｝

二・三度のコールの後、岩西が電話に出る。今は校門付近。

『蝉か！？今大丈夫だな？』

「ああ、せやからサツサ場所教えんかい！」

『今場所のデータを送った。そこにある廃倉庫だ。そこで取引があるって話だが、正直ガセか罠の可能性が高い。本当に行くのか？』

「当たり前やる！たとえ罠でも手がかりになるかも知れんのやからしやあないやる！」

「そうや。やっと見つけた手がかりなんやから。逃すわけにはいかへん。」

『そうか。なら気をつけていけ。ジャック・クリスピン曰く『トンネルから飛び出す前こそ気を付ける』だ。情報とかのサポートはしてやるからしっかりな』

「頼んだで！」

「そうやって電話を切ろうとする。」

『待て、蝉！お前どうやって行くつもりだ？結構遠いぞ？』

「ISで行く。ステルスかけて、高度上げて、神経の反応最大にして「空蝉」を連続使用したらええ！」

『それはお前の体に負担が…』

「関係あるか！今逃したら間に合わんようになってまうやる！」

『っ！わかった…。情報規制は任せておけ。万が一ばれても問題ないようにしておく』

「頼んだで、岩西」

『ああ、お前こそへマするなよ』

誰がするかい、そんなこと。そう言っただけで電話を切る。

校門を出て路地裏に進み、『蝉』を起動させる。ステルスで周りから見にくくし、一気に空に飛び立つ。ある程度上がったところで目的の目掛けて飛ぶ。次いで、『川蝉』を呼び出し、筋力強化、神経反応高速化を行い強化した体で一気に川蝉を投げ、単一使用能力『空蝉』を発動。いわゆるテレポートに近い能力で超高速移動を開始

…目的地まであと15分ほど。急いで飛ぶ。

「…」

目的の場所に到着する。しかしここは…

「罨、やな」

そんな気配がする。独特の空気が漂っている。

たとえ罨やと分かっているにしても、罨を仕掛けるということはそこにワイを狙っているやつがいるということ。案外はずれでもないかもしれへん。そんなことを思って倉庫に入った途端に弾が飛んできた。

暗い倉庫の中、ピット器官を生成、発動する。蛇なんかが持つてる熱による獲物を感知する器官。…どうやら五人ほどおり、全員が武装済み。赤外線を強化した眼も作る。どうやら本職に近いようなやつらや。

…手加減の必要はないやろ。

飛んでくる銃弾を気にする必要がないよう皮膚を硬質化。ダイヤモンド並みの硬度に増した今のこの体を貫くのは並大抵の弾では無理となると次は…

「搦め手、やな」

そういつた瞬間、スタングレネードが飛んでくる。瞬時に視力と聴覚を遮断。…ピット器官作つといてよかったわ。相手の位置を探るのに問題はないが、いかんせん距離が遠い。

「！次は催眠ガスかいな！」

密閉した倉庫内にガスが充満していく。奴らはマスクだか何だかし

ているだろうから問題はないだろう。

(なら、こっちから誘い出すか…)

そう思い、ガスを吸って眠りにつく。

目標が眠ったのを見て敵が近付いてきた。その数は6人。

「眠ったか？」

「分かんが…念を押しといたほうがいいだろう」

そう言つて数発銃を撃つ。貫通し、血が出るのを見て完全に気を失つてると思い蝉に近づく。

「案外あつけなかつたな」

「さすがの化け物も常人の50倍の濃度のガスを食らえばそりゃあそうだろう。」

「そんなにあつたんかい」

そう言つて蝉が目を覚ました。

ガスを吸う前に体の代謝を最大限にまで上げる。寝ても切れないよ

うにしてから、ガスを吸い、眠る。本気でかかったほうが相手も信用するやろつから。

案の定近づいてきた。数は6人。隠れとるが倉庫の外にはもう一人おるみたいや。逃がさないためにも倒れて地面に接触している体から第三の腕、とも言つべき触手を生やし、地面を掘り進んで倉庫の外にいる奴を狙えるようにする。

(2人も数え間違えるなんてな。：ワイも鈍ったか？つと、近づいてきおつたな)

数発撃たれて体に当たるが問題ない。あとで直す。そう思い、攻撃準備。

相手はすでにテリトリー内に入つとる。

「そんなにあつたんかい」

そう言つて相手に顔を向ける。

「馬鹿な！貴様、まだ動けたのか！？」

そう言つて引き金を引こうとするが、もう遅い。

「髪<sup>ヘア</sup>ノッキング完了つてか？」

見えないほどの細さで丈夫な髪(0・01ミクロン、限界張力15

0kgほど)を無数に生やし、相手を拘束する。

「くっ、動かん！」

「しゃべんなや」

そう言つて5人はノッキングを行うことによつて運動神経をマヒさせ、気絶させる。

「！何を！？」

「だからしゃべんなや。後、外のお仲間も倒してるから助けは期待できへんで」

「！？」

もつとも、外にいた奴は逃げられないよう外まで掘り進んだワイの触手によつて、四肢全部がつぶされるといふ悲惨な状態になっているが。

「聞きたいことが一つだけあんな。お前ら雇つたんは誰や？」

「我々が言つとでも？」

「思てへん」

そう言つて最後の一人も気絶させる。拷問する気はないし、どうせ何も知らん奴らやろつ。あとは岩西にでも任せたらええ。そう思い、電話をかける。

「岩西か？ワイヤ。終わったで。全員無力化して倉庫に転がしとる。情報の聞き出しはできてへんから頼んでええか？」

『ああ。相変わらず早いな。ご苦労だった。…やっぱり奴らとは？』

「なんも関係あらへん。ただの下っ端。雇われた奴らやろ」

『そうか…。まああとは任せておけ。適当に回収して情報をはかせ。もう帰っていいぞ』

「頼んだで」

そう言って電話を切る。

結局罨やったがまあええ。何も無いよりはマシや。そう思うが穴のあいた制服を見てどうしようかと思う。どこかで服でも買って帰るかと思っているとメールが来た。送り主は岩西。

沙耶を学校近くで制服持たせて待機させておくから、着替えを受け取って帰れとのこと。…えらく手が早い。まあありがたいことやが。

「とつとと帰るか」

そう思い急いで帰るが、沙耶に脱いだ服をよこせと言われ、間近で着替えを見られることや、いきなり学園外に出ていったことに対す

る反省文を書かされるのは、また別の話。

第12話 突撃 ｋ g o a h e a d ｋ (後書き)

髪のところはトリコのサニーの能力の劣化板みたいな感じ。  
変な所あるかもだけど気にしないでください。

第13話 時間 ～every day passes～

「はい。という訳で…。一年一組代表は織斑一夏くんに決定です！あ！一繋がりでいい感じですね」

そう山田センセが言う。ナツ昨日セシリア・オルコットに負けとつたんちゃうんかい。

「先生！俺は負けたんですよ。なんでクラス代表に…」

「わたくしが辞退したからですわ！」

「へ？」

そう言ってなぜ辞退したかを話し始めた。クラスメイトも認めとるよつや。

ま、ワイには関係ない。ワイが代表にならんでええんやつたらんでもええわい。

「そ…それですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば一夏さんもみるみる」

顔を赤くしながら話すセシリア・オルコット。どうやら岩西の言うフラグっちゅうやつはナツに立ったらしい。…どうでもいいが。

「あいにくだが一夏の教官は足りている。私が直接頼まれたからな」  
そう言っただけ言い合いを始める二人。

どうでもええ。ホンマにどうでもええ。昨日の一軒でただでさえ疲れとんねん。うるさいし他のところでやってくれや…

「座れ馬鹿ども！まだ殻も破れていないようなひよっこが優越をつけようとするな！」

そう織斑センセが言ってこの場はおさまる。

「ホンマにめんどいわ…」  
そうつぶやきまた授業が再開される。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、佐藤、オルコット。その場から急上昇しろ」

ある日の授業。織斑センセにそう言われ、ISを展開。その場から飛び立つ。

ナツはまだISの操縦に慣れてないせいか手こずっている。

「何をのろのろしている。スペック上の出力では白式が一番上だぞ」  
そう織斑センセに怒られるナツ。

「ええと…。急上昇は確か『前方に角錐を展開するイメージ』…」

「一夏さん。イメージは所詮イメージですわ。自分に合った方法を模索するほうが建設的ですよ」

「そう言われてもな…。蝉はどうしているんだ？」

「すぐ人に頼んなや。自分で考えろや」

そう言ってナツの質問を一蹴する。

…最近また機嫌が悪くなってきた。体の痛みが増してきた。時間がもう少ないのかもしれない。

「いや、何かアドバイスくらいしてくれても…」

「一夏さん、わたくしが教えて差し上げますので大丈夫ですよ」

悪いが今はナツにかまってる暇はあんましあらへん。とにかく機嫌が悪いから。

「次は急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10cmだ」

「では一夏さん、お先に」

そう言ってセシリア・オルコットが始める。それに次いでワイも急降下を始める。

操縦について問題はあらへん。一通りの訓練はやってきた。目標から誤差もあまりなく停止する。

ズドオオンツ！！

…ナツが失敗したらしく、グラウンドに大穴をあける。アホか。

『アホだろうな。ありゃ全然使いこなせてねえじゃねえか』

「勝手に通信してくんなや、アホ西」

岩西が勝手にISの回線を使って話しかけてくる。今は授業中や。ええ加減にせい。

『つれないこと言うなよ。こっちも暇なんだよ』

「せやったらこの前の奴らから情報引き出すことにでも専念しろや」

『ああ、それならもう終わったよ。沙耶に連絡しといたからあいつから聞いてくれ。詳しく知りたかったら事務所まで来い』

「さいか。それだけやったら切るで」

『いいじゃねえかもうちよっとくらい。暇って言ったらろっ？』

「知るか。アホ西」

そう言って回線を切る。この場で何か連絡をしてこない以上大した

情報はなかつたんやろう。それでも一応実際に本人から聞くため、事務所向かうつもりやが。

「では三人とも、次は武装を展開しろ」

次にそう指示される。自然体のまま右手にナイフを展開。もともとナイフを展開するとすぐに投げられるように訓練してるから問題ない。やろうと思えば展開終了時にはもう相手目掛けて投げれる。

「遅いぞ織斑。0.5秒で出せるようになれ」

「はい…」

またナツが怒られる。初心者とはいえそんなくらいはできんとこの先やっていかれへん。

「それに比べて佐薙とオルコットは流石だな」

「ありが…」

「ただし。オルコット、そのポーズはやめろ。真横に銃身を展開してだれに打つ気だ？正面に展開しろ」

「で…ですがこれは私のイメージをまとめるために必要な…」

「直せ。いいな」

そう言ってセシリア・オルコットをにらむ織斑センセ。あれじゃあ逆らうこともできへん。しぶしぶうなずくセシリア・オルコット。

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ？あ、はっ、はいっ！」

そう言われライフルを収納し、新たに展開しようとする。けど時間がかかる。どうやらうまくいかへんようぢや。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。…ああ、もう！『インターセプター』！」

…武装の名前を呼んで展開するんは初心者のやることちゃうんかい。

「……何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらおうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。佐雑はともかく、初心者の織斑に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その…」

そう言ってナツをにらむセシリア・オルコット。自分のせいやるが。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片づけておけよ」

そう言つて授業が終わる。とつと戻ろうとするがクラスメイトに呼び止められた。

「ねえねえ、佐藤君。今日の夕食の後つて何か用事ある？ヒマ？」

「悪いけど予定あるさかい。何やるかは知らんが断るわ」

「え、せつかくだから佐藤君も一緒に織斑君のクラス代表就任のパーティーやろうよ」

「悪いな、また今度で」

なんかめんどくさいことになりそうやし、そう断つてアリーナを後にする。外出許可を取つて岩西の事務所に行くために。

だがいきなり障害が立ちふさがる。

「ああ、そのアンタ。ちょうどいいわ。総合事務受付の場所教えなさい」

急な用事ということが無理やり外出許可を取つて出ていこうとしたところを呼び止められた。

呼び止めたのは気の強そうな小柄な黒髪ツインテールの女。…面倒くわい。

「悪いけど急いでんねん。他の奴に聞けや。それに、ジャック・クリスピン曰く『人生を有意義にする一番の武器は礼儀だ』人にものを頼むならもつとちゃんとした聞き方せい」

「いいじゃない、別に。それに、そのジャック…何だっけ？誰なのよそいつ？」

「ジャック・クリスピン。なんやお前も知らんのかい。岩西のアホやっぱ嘘ついとんのとちゃうか？」

「まあいいわ。ほら、早く案内しなさいよ」

おまえん中でワイが案内するのは確定事項かい…。まあ、この手の気の強い奴は何を言っても無駄やさかいさつさと案内して行くか。

「分かったわ。ジャック・クリスピン曰く『許してやるのは最初だけ』。案内したるさかいついて来いや」

「ありがと。そう言えばあんたも男なのね。一夏の他にもいたんだ、男でISが使える奴」

「礼は言えるんかい。まあせやな、ワイも一応男や。ってか自分織斑と知り合いかいな？」

「そうよ。私と一夏はね」

そう言ってしゃべりだす。適当に話しながら目的地まで案内し、別れる。そついや名前も聞いてへんかったけどまあええやろ。別に必要ないし。

思っていたよりもだいぶ遅れてしまったが再び学園の外に向かう。

「で、結局何もわからずじまいか」

今いるのは岩西の事務所。岩西本人から事の顛末を聞いている。

「ああ。あいつらは結局雇われの下っ端。何にも知らされていないかった。雇い主も仲介人を通してから分ならず。さっぱりだな」

わかりきっていたこととはいえ、やっぱり何も情報が得られへんかったんはつらい。

「ただ、あいつらにはある程度お前の情報が渡されていたようだ。まあ、昔のお前がまだ研究所にいたころのデータだからな。今お前がここまで能力を使いこなしていることは知られていないようだ。少々のこととは問題ないだろうが…」

「まあ全部ぶっ飛ばせば片付くやろ」

そうや。何があるうと全部倒しきればええ。そんだけや。

「そついやお前、体は大丈夫なのか？少しとはいえ久しぶりにまともに使ったんだろ。変化はないのか？」

「体の痛みが増した。そんだけや」

「それってやばくねえか？お前、寿命は大丈夫なのかよ？」

「せやな、問題あらへんやろ。後長くて1年、短くて半年後か3ヶ月くらいやな」

珍しく岩西が焦りながら聞いてくるが軽く笑いながらそう答える。

「問題あるだろ！？ちよつと休んだほうが…」

「休んだところで回復するわけやあらへんし、そもそもISS学園にけゆうたんは岩西やで。いまさら心配かい」

「そうじゃなくてだな…」

「ま、さつきも言ったが全部ぶつ飛ばせば終わるやろ。あいつら倒しても元の体に戻るかわからへんが、復讐果たしたら後はどうするかなんてそんなとき考えるわ。果たせず死んだらワイの負け、果たしたらワイの勝ち。さらにそのあと元の体に戻れたらハッピーエンドやな」

そういうもんやろ。実際あの研究所の奴らに会ったら殺してまうかも知れんから、元の体に戻る方法なんて聞かれへんやろうがな。

「お前……死なせねえよ。元の体に戻る方法だって俺が探してやる。任せとけ」

「期待せんとまತ್ತるわ」

そう言って帰る準備を始める。

「そついや、今日ってお前のクラスの代表決定パーティーやるんじやねえのか？出なくて良かったのかよ」

「どこから手に入れてん、そんな情報」

ワイはそんなこと一言も言った覚えはないが。

「気にするな。お前が今ここにいてことはそつちよりおれのほうを優先してくれたのか？嬉しいじゃねえか」

「アホか。何ゆつてんねん」

ホンマに岩西の奴もようわからん。何を考えてんねん。

「照れんなくて。そうだ、一つ教えといてやる。明日、転校生が来るぜ」

「こんな時期にか？」

「お前のクラスじゃないがな。隣の2組に中国の代表候補生が来るぜ。鳳鈴音つて奴だ。織斑一夏の二人目の幼馴染で、小柄な気の強い奴だ。あと使用ISは」

「ああ、そいつやったら多分さつきここ来る前に会ったで」

「なに？」

「事務所探しとるゆつててな、めんどいけど断るほうがもっと面倒なことになりそうやったからな。道案内させられたわ」

「それでもちゃんと案内はするんだな。優しいじゃないか」

「じゃかましいわ。だいたいどっから手に入れてくんねん。そんな情報」

毎回そうやがまるで見てきたことかのように話す岩西。こいつの情報網はどうなってるんや。けどそれでも情報を手に入れられへんあいつらも一体なんなんや。

「お前は知らなくてもいいことだよ。いつかお前が決着をつけたときにでも話してやる」

「ジャック・クリスピン曰く『10代は知らないことは多いほうがいい』やろ。もう聞く気も失せたわ」

「細かい情報はまた沙耶に送っとく。後はしっかり食ってしっかり休んどけ。何かあつたら教えてやるしな」

「そうか、頼んだで」

そう言つて岩西の事務所を出る。時刻は8時過ぎ。急げば9時までには帰れるやろ。

そう思つて少し急いで帰る。

次の日の朝。沙耶と朝食を食つてから教室に向かう。

前のドアから入ろうとしたら入口を塞いだる奴がおつた。昨日会つて岩西も言つてた鳳鈴音やつた。

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「とりあえずそこどけや」

入口を塞ぐ奴をどけて教室に入る。

「あつ！あんた昨日のクリスピン！人がせつかく雰囲気作ってたんだから邪魔しないでよ！」

その言葉を見殺しして自分の席まで行き机に伏せる。最近は何か疲れることが多かったからゆつくり休みたい。

「いや、格好付けるのすげえ似合わないぞ、鈴」

「んなツ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！それに無視してんじゃないわよ、クリスピン！」

「は？クリスピン？誰だよそいつ。あいつは蝉だぜ？」

「どうでもいいのよそんなこと！大体アンタ」

言い合いが続くが無視する。しばらくしていつもの

パァン！

という音が聞こえると、鳳鈴音は帰って行ったようやった。織斑センセの登場。ナツの幼馴染ゆつことは織斑センセのことも知ってる

やろつしな。その怖さも知ってんやろ。

「変なことを考えるな、佐雑。SHRを始めるぞ。全員席に着け」  
…何でわかんねんな。

午前の授業は篠ノ之箒とセシリア・オルコットはさんざんやった。山田センセに5回注意を食らい、織斑センセに3回叩かれとった。今はそのことでナツにキレとる。理不尽やな。

「ま、まあ飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……ま、まあ、お前がそう言うのなら、いいだろう」

「決まりだな。蝉も行こうぜ」

ナツがワイを誘ってくるが、行く気にならん。なんか妙に体がだるい。痛いのはいつものことやが。

「悪いけど断るわ。ワイはこのまま寝る」

「飯食わなくてもいいのかよ？体に悪いぜ」

「問題あらへんし、ほつといたらまたあいつが来るやろ。大丈夫や」

「あいつ？あの4組の人か？あの人結構可愛いよな」

そう言うナツ。その言葉は後ろの二人に聞かせたらあかんやろ。

「さっさと行くぞ、一夏！」

「そうですね、一夏さん！佐藤さんは疲れていらっしやるようなのでそっとおいてあげましょう！」

「あ、ああ。じゃあな、蝉」

そう言って二人に引き摺られて出ていくナツ。やっと静かになった。

「蝉さん！今日もお昼ご飯作ってきました！一緒に食べましょう！今日の隠し味は私の愛ですよ！」

…何でこいつはこんなにテンション高いんや。そんな沙耶に連れられて屋上に向かう。どうやらゆっくりはさせてくれへんらしい。

「休ませてくれや……」

そう、切に願う。

第13話 時間 ｛ e v e r y d a y p a s s e s ｝ (後書き)

なんか無理やり詰め込んだ感じが…。

とりあえずあと1話くらいで原作1巻部分が終わります。2巻からがまだあまり書けていないので更新は遅れます。

あと一応自分の構想としてはこの小説は原作3巻終了くらいで終わるつもりです。あんまりだったら続けても意味ないし。そんなつもりで。

それでは拙い作品ですが、読んでくださってありがとうございます。ごさいました。

第14話 乱入 (what is the purpose?)

時間はあつという間に過ぎる。最近はいライラよりも体調不良が続く。今までこんなことはなかったのに、もしかしたらホンマにやばいんかもしれん。

ナツに代表戦のために特訓を手伝ってくれと頼まれたりしたが、あまりそんな気分にはなれないので全部断った。

「無理せずちゃんと休めよ。」

そうナツに言われ今日も寮の部屋の戻る。沙耶にも体調が悪いことは伝えとるから、あまり騒がず看病してくれとる。

最近は変なモヤモヤも感じる。

ホンマになんなんやる。この感じ。

「うわあ…。満員御礼だな」

モニターに映る観客を見てナツがそう言う。

「それだけ注目されているのですわ。ちなみに会場に入りきらなかった人たちは校舎内のモニターで観戦するんだとか」

「うう…。何気にプレッシャーかけるなよ…」

そう言うため息をつくナツ。緊張しとんのか。

「ま、ここまで来たら気楽にやり。どうせ今さらどうにもならんわ」

「佐薙！そんな風に言う必要はないだろう！？」

「そうですね、佐薙さん！ここは何かアドバイスでもして差し上げるべきところでしょう！？」

「落ち着けよ二人とも。まあこのほうが蝉っばいからいいよ」

アドバイスなあ…

「…気持ち」

「え？」

「心の持ち方。絶対負けるか、負けたるか、負けてたまるか。そう思って戦え。ちったあマシになるわ。勝つ気がない奴が勝つことなんか絶対できへん。そんだけや」

「もともと負けるつもりもねえよ」

「せやったらええわ。大したこと教えられんで悪かったのう。ま、ワイは観客席からみとるわ。ほなな」

そう言っつて後ろに手を振りながらピットを出ていく。やる気はあるみたいやから大丈夫やる。

『一組、織斑一夏。二組、鳳鈴音。両者…規定の位置まで移動してください』

クラス対抗戦が始まる。うちのクラス代表のナツの試合を観客席から見る。ようやくと体調が回復してきた。とはいえ、まだ油断は禁物やが。

「蝉さんはどっちが勝つと思いますか？」

「さあの。一応ナツにでもかけとくわ。あれでもうちのクラスの代表やし」

「じゃあ私は鳳鈴音にかけます。勝ったら何か一つお願いを聞いてくださいね」

そう隣にいる沙耶と話す。

実際ナツが勝つのは難しいと思う。練習は熱心にやっとなるようやが、初心者であることに変わりない。零落白夜も必殺の威力はあるが、文字通り諸刃の剣。使いどころが難しい。

「ま、ここでワイが考えてても意味ないか」

そう思ってアリーナ上の二人を見やる。

「頑張れや、ナツ」

柄にもなく、そうつぶやく。

『それでは両者、試合を開始してください』

試合が始まる。

序盤は鳳鈴音が優勢。見えない攻撃、衝撃砲に手こずってるみたいや。

「あんなものより蝉さんの声のほうが強いです」

「まあ元が違うからな」

ただの兵器の攻撃よりも人外で人間兵器ともいえるようなワイのほうが出力は高い。声やから結構無差別に攻撃できるし。

「このままだと賭けは私の勝ちのようですね」

「さあ、どうやるな」

ナツも覚悟を決めたように攻撃準備をしとる。ここが勝負の分かれ目やるな。そんなことを思っで見ていると、

ズドオオオオンッ!!!

という音とともに謎のISがアリーナに侵入していた。

「なんやあれは？」

「分かりませんが…。不測の事態であることは間違いないようですね」

突如現れた会場のバリアーを破るほどの力を持ったISの登場に周りの観客も慌てている。

そのISの姿が全身装甲であることも含め異常であることは確かだった。

事態の確認に岩西に電話をかける。

『なんだ、蝉？』

「試合中に変なISが乱入してきおった。あれはなんやねん!？」

『いきなりそんなこと言われても分からねえよ。映像が何か送れ』

「私が送ります、蝉さん」

そう言っつて沙耶が荷物から取り出したビデオとパソコンを操作し始めた。

『ちょっと待ってる。……なんだこりゃあ？全身装甲とはまた珍しいな』

「そんなこと聞いとんとちゃうわ。あれはなんやねん」

『俺だつてなんでも知ってるわけじゃねえよ。ただ…気にはなるな。』

蝉、あのISのデータを手に入れてこれるか？」

「直接接触すれば何とかならへんこともないけどやな…」

アリーナを見やるがシールドは貼られたまま。弱いシールドやったら破られへんこともないが…

「遮断シールドのレベルが4になっていきますね。破れないことはないでしょうが、中で戦っている二人に影響が出ますね」

音波振動増幅兵器での攻撃は強力やが、でかい音が発生するから二人の集中力を乱してまう。

あとは完全変化での攻撃やが…そう簡単に使うものでもない。人の目もあるこの場ではなおさら。

「打つ手なし…か」

『まあ戦況に注意している。いつかチャンスが来るだろ。それにあれは奴らとは関係ない、そんな気がする』

「なんでそう思うねん？」

『うるせえ、勘だよ。勘。それにお前目当てだったら直接来るだろ？』

そんなもんか。そう思い、またアリーナに目を戻す。ナツの攻撃がかわされている。

…ワイが行くまで無事でいろよ。

心配するなんて柄でもないがそう思い戦況を眺める。

「一夏あつー！」

キーン……とハウリングが尾を引く。篠ノ之箒が叫んどる。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

そう言っただけでまた叫ぶ。下手したら狙われるぞ。

「蝉さん、もう少しでシールドを解除できそうです！攻撃準備を！」

沙耶にそう言われ『蝉』を展開。シールド前まで行き敵の近くに接近する。そこにはセシリア・オルコットもおり、ナツもこっちに気づいたみたいや。

息を大きく吸い攻撃準備に入る。

ナツが鳳鈴音の衝撃砲を受けて瞬時加速を使い一気に敵に接近。そのISの右腕を切り落とす。しかし同時に左拳での反撃を食らう。が、

『……狙いは？』

『完璧ですわ！』

「任しとき」

セシリア・オルコットのブルー・ティアーズの四機同時射撃と、ワ  
イの声の範囲を絞り振動を凝縮させた『音玉』が敵ISを襲う。

ボンっ！という小さな爆発を起こし、落下していく敵IS。撃墜完  
了。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

『セシリアと蝉ならやれると思っていたさ』

「けど、無茶に変わりはあらへん。ようやるわ」

そう返事する。セシリア・オルコットはナツに褒められ、顔を赤く  
しとる。あとはさりげなくあのISに近づいてデータの引き出しを…

141

『あのISが再起動した！織斑が狙われているぞ！』

岩西からの通信を受け、即座に『川蝉』を展開。

ナツも気づいたみたいやがもう攻撃するだけのエネルギーはないみ  
たいや。

ナツと敵ISの攻撃の軌道上に『川蝉』を投げ『空蝉』を発動。ナ  
ツをかばうように立つ。

『翅』を体の前にやりレーザー攻撃を防御。完全には防ぎきれず衝  
撃が体を襲うが問題ない。構わず接近する。

「とつととくたばれや！ボケェ！」

右腕を強化、筋力増幅。瞬間的に筋肉が膨れ上がり、通常の倍以上の力でぶん殴り、貫く。

敵ISが完全に沈黙する中、後ろでナツがゆっくりと落ちていった。

「で、衝撃砲を受けた反動でそうなたってわけか」

「ああ。体中が痛い」

ワイかて痛いわ。お前の何倍もの痛みが常に襲ってる。

「自業自得や。もっと自分が強けりゃ他にも手はあつたはずやで」

「面目ない……」

「ま、無事ならええんちゃう。生きとんなら何よりや」

「……」

「なんや？」

「いや、蟬にそう言われるとは思わなくて……」

なんやそれ。確かにワイも似合わんとは思つが……

「そんな時もあるわ」

「そういうもんか…」

「ああ。ほな、ワイはいくで。他にも見舞いに来るやつがおるやろ  
うし」

そう言つて保健室から出ていく。

最近感じていたモヤモヤ。

ナツや沙耶、セシリア・オルコットや篠ノ之箒と関わつとるうちに、  
人付き合いや友人を持つのも悪くないと思ひ始めた。

今まではこんなこと感じへんかったが、ま、悪い気分やないしええ  
やろ。そう思つて寮に戻るうとする。

143

だが、そう簡単には戻してもらえなさそうや。

「佐薙。少しいいか？」

廊下の途中で待ち伏せていた織斑センセがそう話しかけてくる。

「なんか用でつか？疲れとるんで部屋に帰つて休みたいんですが」

「正直に話せば時間はかからん。お前が最後に攻撃した時に抜き取  
つたあのISのデータとお前が知っていることを話せ。それと…お

前自身についてだ。お前は何者だ？佐薙蝉」

相変わらず威圧的な眼でワイを見やり、そう言う織斑センセ。下手な隠し事は通用しそうにない。

「さあて、何者でしょうね」

逃げられないと分かっているも、そうお茶らけて答える。

第14話 乱入 (what is the purpose?) (後書き)

これで一巻部分終了。続きがまだ書けていないので次はまた一週間後くらいに。

それではまた。

閑話 1 出会い (change my world) (前書き)

本編と関係ありません。あと内容もよくわからないかも。

とりあえず沙耶視点で。それではどうぞ。

## 閑話1 出会い \ change my world \

私が蝉と名乗る少年に出会ったのは3年ほど前だ。

当時私は中学1年生。親の都合、親が蒸発し祖父母に引き取られたのだが、今まで住んでいた町から離れた所に行くことになった。特に親しい友人などいなかったから問題はなかったが新しい場所に私は馴染めなかった。

それどころか当時はいわゆるイジメにあっていた。

理由は覚えていない。特に気にしていなかったから。目付きが気に入らないとか態度が気に入らないとか無愛想とかそんなところだろう。同年代では頭がずば抜けてよかったこともあるのかもしれない。まあとにかく人付き合いが苦手だったのだ。

親について思い出せる記憶も怒鳴り合って喧嘩しているものだけ。両親が離婚した後引き取ってくれた祖父母も私のことを気にすることなくいないものとして扱っている。同年代の人たちも話が合わないので喋ることもなかった。

思えばこのように人付き合いというものを全然していなかったことが当時の私の性格を作り上げていたのだろう。とにかく、口数も少なく感情を出すこともない子供だった。両親が喧嘩しているところばかり見て育ったのでああはなりたくないと思ったからだろうか。

(何かに怒ることや憎むことなんて意味がないですし、こうやって影から誰かを貶めるなんて幼稚なことですね。こんなことをして面白いのでしょうか?)

今日も学校に登校。私の机の上へのせられた花瓶やらゴミやらを片

づける。まったく、いつの時代だ。

遠くで一部の女子と男子のグループが笑っている。彼らが直接手を  
出してくることはない。一度呼び出された時に適度に力の差を思い  
知らしめたからだ。

……直接手を出す勇気がないならやめればいいのに。

そう思いながらも今のこの状況を甘受する。波風を立てるつもりは  
ない。

ある日。変化は突然訪れた。私の一生を変える出来事が。

転校生がやって来た。無造作に伸ばした金髪と目が隠れるくらいに  
巻いているバンダナが印象的だった。けれど興味はない。私に関わ  
ることはないだろう。

「……ワイの名前は岩西蝉。蝉って書いてゼン。あと不本意やけど  
苗字は岩西。せやから絶対名字で呼ぶなや」

それが私と蝉さんの出会いだった……

関西弁を使っているので関西圏出身なのだろうか？自分の名字が不  
本意というのも珍しい。けれども、関係はない。そう思う。

彼の席は私の隣になった。けれども気にすることはない。どうせ話  
すことはない。次の授業は理科。第一理科室での授業なので移動し

ようとする。

「おい、そこのお前」

転校生の彼に話しかけられた。しかし私は答えない。

「次の授業教室移動やる？どこでやるか分からんねん。案内しろや」

それが人にものを頼む態度なのだろうか。ただ言葉使いを変えたところで私は答えなかつただろうが。

「……なんや無視かいな」

「やめとけよ、転校生」

そんな彼に誰かが話しかける。あれは誰だ？とりあえず少年Aとでもしておこう。

「ノーマンに話しかけても無駄さ。あいつは誰とも話さねえよ」

「ノーマンて、あいつか？」

「ああ。誰とも話さないから周りに誰もいない。だからNo Me n。それと表情もないから能面。そんな感じで付いたあいつのあだ名だ」

「ふーん。まあええわ。お前次の教室教えろや」

「ああ。行くつぜ転校生」

そう言つて教室を出ていく二人とその取り巻き。少し見えた転校生の表情が少し不機嫌そうに見えたのは気のせいだろうか？

次の日。今日も今日とてまたいつもの光景。机の上へのせられたものをどけていく。ただそこに変化はあつた。

「なんや、それ？」

転校生が私の様子を見てそう聞いてくる。心なしかその声には怒りが混じっている気がする。

「……」

私は答えない。いつも通り黙々と片づける。

「転校生、ほっとけて。いつものことだよ」

「いつものことやと？」

遠くで私の様子を見て笑っていた少年Aが彼に話しかける。

「昨日言つただろ？あいつ俺らがせつかく話しかけてやつても返事しないし、無視するし。おまけにちよつとばかり勉強できるからつてこつちを見下してきやがる。だからお仕置きしてるだけさ。いつものこと。ほっとけよ」

「いつものことつてあんなん毎回やつてんか？」

彼の口調が少しきつくなる。怒っているのだろうか？馬鹿馬鹿しい。

「ああ。なんだ転校生、怒ってるのか？やめとけよ。俺ら怒らすと怖い」

ドカン！

人を殴るには大げさな音が聞こえ少年Aは最後までしゃべりきることができなかつた。転校生の彼に殴られたのだ。文字通り吹っ飛んだ少年Aは机を巻き込みながら壁に激突した。

「なッ！おまえ！」

「じゃかしいわ！ワイはなあ、お前らみたいな陰でこそこそ笑ってる奴らが一番嫌いなんや！もうブチギレたわ！全員ぶっ飛ばしたる！」

そこからはまさに地獄絵図ともいえる光景だった。毎日私に嫌がらせをしていた少年Bが、Cが、Dが彼に殴られ飛んでいく。女子Aも殴られ倒れる。

「あ、あんた女子にも手を出すの！？最低じゃない！？」

こんな時にだけ自分が女子であることを盾にしようとする女子B。ものすごく醜い。

「はあ？んなもん男やろつが女やろつが若かるつが年寄りやろつがヒトはヒトやる？人間なんてみんな同じやろつが。それにワイ、差別って嫌いやねん」

そう言つてまた殴る。彼から逃げようとする人も立ち向かう人も止めようとする人も全員殴つている。特にさつき私を見て笑つていた人は全員重点的に。少し血も流れているこの状況はまさに惨劇と言つてもよかつた。

全員が倒れ伏す中立つているのは彼と私だけ。少しだが、ほんの少しだが気になつたので聞いてみる。

「何でこんなことしたんですか？私を助けたつもりですか？だったら余計な迷惑です」

「何でワイがお前なんか助けなあかんねん。お前なんか嫌いや、嫌いすぎ」

「だつたらなぜ？」

「言つたやろ？こいつらがムカつくつて。陰でこそこそ笑つてる奴らが嫌いやつて。そんだけや。それに……ワイはお前も嫌いや！」

そう言つて私にも殴りかかってくる彼。何とかかわすことに成功したが壁に当たつたその拳はヒビを作つていた。

「そんな物で殴られたら無事では済みませんよ？それに何であなたはそんなに怒つているんですか？」

「お前あんなんされてムカつかんかつたんかい！？怒らんかつたんかい！？やめさせよう思わんかつたんかい！？」

「怒る必要がなかつたので。それに怒るといふ感情もよくわかりません」

そう答えるが彼は納得がいていないようだ。壁を殴りつけヒビがさらに広がる。

「ちゃうわ!? お前は怒るってのが分からんのやない! ただ逃げとるだけや。波風立てるのをこわがっとするだけや!」

「そんなことは」

「あるわ! 怒りがわかるわからん以前の問題や! そんな周りを気にして感情操られとるんはただの人形やないか! お前みたいなやつ生きとんのに死んでると同じやねん!」

ツ!! 今のは聞き逃せない。私は私だ。こんな周りの人間とは違いちゃんと意志をもって行動している。

「私が人形ですって!? そんなことありません。私は私の考えのもとと行動してます。それに、周りに怒ることや感情をぶつけるなどしてどうなるんですか!? そんな波風立てるようなことをしても何も変わら」

「変わるわ!」

「!」

「たとえでたらめでも、自分を信じて対決していけば世界は変わる! いや、変えたるわ! そんなことも思われへん奴が生きてて何になんねん!」

……彼の一言で私の中の何かはじけた気がした。世界を変える。

対決する。そんなこと考えもしたことがなかった。けど……そうなのでしょいか？こんなつまらない日常も生活も変わるのでしょうか？

「おいっ！そこのおまえ、何をやっているんだ！」

ようやく騒ぎに駆け付けた教師がやって来た。周りの惨劇を作り出した彼を連れていこうとする。そんな彼に聞いてみた。

「変わるって……。こんな状況や私も変わるといいますか？」

「知るか、そんなこと。ただ自分が動かな変わるもんも変わらんわ。

……ワイは逃げへん、対決する！そんだけや」

そう言って彼は連れて行かれた。世界を変える、か…

今回のことの顛末。彼の処罰は3カ月の停学。しかしそれ以降彼を見ることはなかった。風の噂によるとこの学校をやめて別の所に行ったとのことだ。

あれから彼の言ったことについて考えていた。まがいなりにも彼は実際あの行動で私の世界を変えたのだから。

…気づけば彼のことばかり考えている。彼の行動原理が気になる。彼はあの時もっと違うことに怒りを抱いている気がした。あそこまですべて突き動かしているものは何なのだろうか。それを、彼のこともっと知りたい。

そう思った私は居てもたつてもいられず調べた。再び彼に会うために。これも一つの対決だ。私の世界を変えるための。彼を知るため

の。

そしてたどり着いた。彼を最もよく知る人の所へ。彼を知る手がかりへ。

「よう、お嬢ちゃん。あいつのことが知りたいうって？あんたにすべてを知り、それを受け止める勇氣があるのかい？」

もちろんだ。彼のことを知るためならどんなことでも受け入れて見せる。そして…

「これからもお供しますよ、蝉さん」

「なんや急に？どないしてん？」

あなたの命が尽きるか、私の命が尽きるまで。ずっとともに。私の世界を変えたあなたとともに。それが私の生きる理由。

閑話 1 出会い \ change my world \ (後書き)

けど沙耶がヒロインではないという不思議。なんかもう何が書きたいのかがわからなくなってきた。

とりあえず完結できるようにには頑張るつもりです。けど心が折れたらこの小説自体消すかも。

第15話 日常 (gotonextstage) (前書き)

原作2巻部分です。まだあんまり入っていませんが。

それではどうぞ。

第15話 日常 (go to next stage)

「蝉さん、お元気で！また来ますから！すぐ行きますから！待っていてください！」

…何をや。

織斑センセとの話が終わって部屋に帰ると部屋の調整がいたため沙耶が引越しをすることになった。本人はかたくなに拒んでいたが、いつでも遊びにきてええと伝えるとしぶしぶながら了承し出ていった。

その引越しの際、荷物運びなどを手伝つとると段ボールいっぱいワイの写真が入つとるのがあった。…何かもう沙耶が怖い。

手伝いを終え、一人部屋となった自分のベッドの上に寝転がる。

…あの後織斑センセと話したこと。

あの無人ISのデータはあの場で取ったやつをそのまま渡した。どうせ中身は壊れているため大したことは何もわからへんやろうし、データはすでに岩西に転送済み。問題あらへん。

ワイ自身のことについては、極めて人工的な存在。人の手によって作り出された改造人間的なモンであると伝え、あまり深く詮索はしないでくれと頼んだ。敵対する気もないことも伝えると相談ならいつでも乗るといわれ、去って行った。

ある程度は分かっていたようでそこまで深く掘り下げられはせえへ

んかったのが救いやった。

「ま、なんとかなるやる」

そう言っって休む。

時間は過ぎ、今は6月頭の日曜日。

あれから大したこともなく、奴らの情報も分からないまま。進展はまったくなし。焦っても何も変わらんとはいえ、ちと辛い。

で、そんな休日にワイは…

「お、せみだ〜、せみが来たぞ〜」

「せみの兄ちゃんだ〜」

「遊んで遊んで〜」

岩西への依頼、ていうかボランティアみたいなものまで岩西の事務所近くの幼稚園のガキどもの遊び相手をしに来ていた。

「あ、コラお前。髪ひっぱんな!」

「せみがおこった〜。せみでもおこるんだ〜」

「おこんなよせみ〜。あそべよ〜」

「遊んだるから髪は引つ張るなや。痛っ！誰や今髪抜いたやつ！」

「あはははは！せみおもしろ〜」

「おこつたんならつかまえてみるよ、せみ〜」

「じゃかしいわ、ガキども！やったるうやないか〜！」

そう言つてガキどもを追いかけまわして遊ぶ。そうやって日が暮れるまでガキどもと遊ぶ。

…やっぱ子供は嫌いや。生意気やしからかつてきおるし。

「じゃ〜な〜、せみ〜。また来いよ〜」

「またあそんでね、せみのお兄ちゃん」

「二度と来るかあ！くそガキども！」

そう言つてガキどもは帰つていく。やたら疲れた。もう帰つて寝たい。

「いつもありがと〜ございます、佐藤さん。」

この幼稚園の先生である辻村さんが話しかけてくる。

「礼なんていらへん。岩西に言われて来とるだけやさかい」

「それでも、ありがとございます。あの子たちいつも佐藤さんが来ると楽しそうなので」

そう言うもんなのか…

「ま、ええですわ。ほなワイはもう帰りますわ。また来る機会あったら連絡しますわ」

「ええ、またお願いします。今はIS学園に行ってるんですよ？大変だとは思いますが頑張ってください」

そうやって幼稚園を後にし、岩西の事務所に向かう。面倒やが…

「どつやらうまくやってるみたいだな、蝉」

「一応な。つてかあれからなんか進展ないんかい。いつまでこうしてんねん」

「そう言われてもなあ。ないもんはないんだから仕方ねえよ。ま、流石にもうそろそろ何かしてくるだろ。それまで待て」

「待てって言われてもなあ…」

時間は過ぎていくし、残り時間も短くなっていく。焦りはあるがどうにもならないと分かっているのでどうしようもない。

「ああ、それとな。連絡事項だ。明日、お前のクラスに転校生が来

るぞ。それも二人もだ」

「毎回思うがどこからそんな情報持ってくるねん」

「ジャック・クリスピン曰く…」

「クリスピンはもうええわ。で、どないな奴らやねん？」

「なんだ、気になってんのか？珍しいこともあるもんだな。一人目はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生で専用機はシユヴァルツェア・レーゲン。ドイツの第三世代機だ。基本的に高火力だがAIC、もとい慣性停止結界っていう対象を停止させることができるやつが特徴的だな。使うのには集中力があるからお前なら戦いながら乱せるから問題ないだろ。あとこいつは現役の軍人で織斑千冬とも面識がある。一時期教官だったそうだ」

「そらまたけつたいなやつぢゃな」

「しかも遺伝子強化体として生まれ、戦うための道具として育ってきたんだとよ。ISとの適合性を上げるためにヴォーダン・オージエなんてもんまで受けてる。だが、行っちゃあなんだが、所詮お前の劣化版だな」

「ワイと比べたらかわいそうやで」

遺伝子強化どころか、あらゆる進化の可能性を追求したワイはすでにヒトを超えたともいえるような能力をもつとる。そもそも比較対象にすらならん。

「で、二人目。シャルル・デュノア。フランスの代表候補生にして

「三人目の男だ」

「三人目の男やと？」

このタイミングで他にもISを動かせる男が出てくるとはな。少し驚いた。

「ああ。そうなっではいるが…。まあ、自分で確かめな。専用機はラファール・リヴァイブ・カスタム？。第二世代だが拡張領域が元のラファールよりも2倍あるし、それを活用した高速切替ってのが得意だ。器用だから距離を選ばず戦えるし、性能も第三世代に劣ってねえな。代表候補生の名は伊達じゃねえってか」

「そうかい。ホンマにどっから仕入れてくんねん。そんな情報。そこらに落ちとるようなもんやないやろ」

「お前にはわからねえ方法があるのさ。それに俺はもともと物知りだぜ？」

そう言っつていつものカマキリ顔で笑う。

「ああ、それと。シャルル・デュノアは秘密を隠してる。知りたかったら『俺は全部知ってるぞ』だ。そう言え。真面目なやつだからな。そう言えばボロを出すだろ。ま、知りたければだがな」

「なんやそれ。秘密ってなんやねん。実は女です、とかか？」

「それは自分で確かめな。全部教えちまったらつまんねえだろ？あとは例の如く沙耶にデータを送っている。見せてもらいな」

「そんなもんよりあいつらの情報送れや」

そう文句をつけ、事務所を出ていく。

イライラもないし、機嫌も悪くない。けど体中を襲う痛みだけはおさまらへん。少しづつ増してきているような気がする。

「とりあえずいつも通り過ぐすか…」

焦るな。そう自分に言い聞かす。

第15話 日常 (gotonextstage) (後書き)

最近いろいろ忙しいのと出来に納得がいつていないので更新が遅れています。

何か別の話とかも書いてみたいし。

とにかく頑張るのでよろしくお願いします。

第16話 転校生 \ d a i l y l i f e w h e n i t c h a n g e s

だいぶ投稿期間が開きました。

ありきたりですがリアルが忙しかったので。

とりあえず16話とついで。

「おう、ナツやないか」

「よう、蝉」

岩西のところから学校に帰ってきて今は食堂で沙耶と飯を食つとる。そこにナツが鳳鈴音とともにやって来た。

「一緒に食べていいか？」

「ワイはかめへんけど…横の奴はそれでええんか？」

そう鳳鈴音に聞く。こいつもナツに惚れとんやろうから二人きりで食わしたったほうがええんやないか。

「いいわよ別に。クリスピンこそいいの？」

「せやからかめへんて。ってか誰がクリスピンやねん。ワイは蝉や」

「じゃあクリスピンって誰よ？」

「知るか、ワイのほうを知りたいわ」

「何それ？」

鳳鈴音が呆れとる。しゃあないやろ。ホンマに知らんのやから。

「ワイの上司、こいつが岩西つちゅうんやけどな。またこいつが性格悪い奴なんやが…。まあそれは置いて、その岩西のアホがようそいつの言葉を引用すんねん。お前はクリスピンの言葉がないと喋られへんのかって言うくらいに。で、岩西曰く、ジャック・クリスピンは有名なロックミュージシャンらしいがそんな奴の情報なんかどこにもあらへん。誰に聞いても知らんし、ネットにも情報があるへん。嘘ついとんのとちゃうんかって聞いたたら『ネットの情報がすべてだと思うな』やと。ホンマム力つくわ、あのカマキリ顔！」

「あんたも苦労してるのね」

あまり関心がなさそうに答える鳳鈴音。お前が聞いてきたんちゃうんかい。

「で、結局お前も知らんねんな、鳳鈴音？」

「鈴でいいわよ。ま、そんな奴知ってるわけないでしょ。あんたやっぱり騙されてるんじゃないの？一夏はどうなの？」

「いや、おれも聞いたことないぜ。そんなに音楽に詳しくはないけどな」

やっぱそんな奴おらんのとちゃうやろうか。岩西のアホが。

「やっぱ嘘なんかなあ」

そこで会話は途切れお互いに飯を食べ始めた。今日はガキどもの相手をして疲れたから飯の量も多い。ちなみに沙耶は横で普通にきつねうどんを食べとる。

「沙耶は知らんのか？クリスピンについて」

「いえ、私も岩西さん以外から聞いたことがありません。…あの人もよくわからない方なのであまり気にしないほうがいいと思いますよ」

「せやなあ…」

ひとまずそのまま黙々と食べる。ナツはリンとしゃべっとる。途中でリンはお茶を取りに席を立った。

「あっちのテーブルにえらい人ばかりできてるけど、何か知ってるか？」

突然、ではないがナツがそう話しかけてくる。

「さあ。ワイは知らんで。沙耶は何かしつとるか？」

「知ってますけど…知らないほうがいいと思いますよ。特に織斑さんは」

「なんやそれ？」

沙耶は何かしつとるみたいやけど、教えてくれへん。まあええか。

「あーっ！織斑君だ！佐薙君もいる！」

「えっ、うそ！？どー！？」

「ねえねえ、あの噂ってホント　　もがっ！」

ナツが言っただけ一団が来る。噂ってなんや？

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは……」

「　　バカ！秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人だし……」

なんか焦つとるがようわからん。

「噂って？」

ナツがそう聞くもつまいこと……ではないな。焦りながらも連携プレーでごまかして去って行った。

「なんやったんや……。まあええわ。先帰るで」

「おお、また明日」

そう言っただけ食堂を去る。横に沙耶も付いてくる。

「そう言えば……さっき皆さんが言っただけ噂ですが」

そう前置きして沙耶が話し始める。

「今月の学年別トーナメントで優勝したら織斑一夏と付き合える。そんな噂です。」

「そんな話があるんかい。当の本人は知らんようやったで？」

「まあ、あくまで噂ですから。といってもほぼ事実となっていますが。……ちなみに蝉さんにも同様の噂が立ちかけましたが、私が全力で消しときました。問題ありません」

そう答える沙耶。もう気にせえへん。気にしてたらキリがない。

「そう言えば岩西さんから例の転校生の情報が届いています。見に来ますか？」

「せやな。一応見にいこか」

「では私の部屋に来てください。ついでに泊まっていきませんか？」

「断るわ」

なにをゆうとんのやコイツは。そう思いながら寮に帰る。

「今日は何と転校生を紹介します！しかも二名です！」

次の日、教室にて。山田センセがそう言う。

ホンマに岩西の情報通りや。あいつはホンマに何もんやねん。沙耶に見せてもろつた写真通りの奴らが入ってくる。ホンマに一人は男。一気に教室が騒がしくなる。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

礼儀正しい立ち振る舞いと中世的な顔立ち。岩西がコイツはなんかを隠しとるって言ってたけど、ホンマに女とちゃうんか？そう思えるような見た目や。

「こちらに僕と同じ境遇の方がいるときいて本国より転入を」

そこまで言うともた教室が騒がしくなる。瞬時に聴覚遮断。周りが静かになるまでその隣におる奴を見る。

ドイツの軍人さんは我関せずとばかりに腕組みをしている。挨拶をしても

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけで終わる。対照的な二人やな。そんなことを思っているとナツがラウラ・ボーデヴィツヒに平手打ちされとった。

そう言えば岩西がああ軍人は自身の教官である織斑千冬がモンド・グロツソの第二回大会で決勝を棄権させる原因を作ったために怨んでいるとのこと。せやけどいきなり平手はないやろ。

ナツは怒って突っかかるが、それは無視される。だいが嫌われとな。

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替え  
て第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。  
解散！」

自分の弟が殴られたことには関せず、解散の命令を出す織斑センセ。  
とつとつ行くか。

「おい、織斑、佐薙。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう  
…んなもんナツだけに任せえや。」

「君が織斑君で、そっちが佐薙君？初めまして。僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

「そういうことや。サッサ行くで」

ナツがシャルル・デュノアの手を取り教室を出ていく。そのあとを  
ワイは付いていく。

「とりあえず男子は空いているアリーナ更衣室で着替え。これから  
実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん…」

何か様子がおかしい。だが気にする暇はない。

「ナツ、前から女子の大群がきおったで」

「げっ！本当だ！どうするよっ？」

他のクラスの奴らが男の転校生を見に来たんやろつ。

「な、何？なんでみんな騒いでるの？」

「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

「……？」

なんかよう分かってへんような顔をしとる。ホンマにこいつ男ぢやうんやないか？

「無駄話はええわ、ナツ。ショートカットするから飛ぶぞ。つかま  
れや」

「また飛ぶのか？あれちょっと怖いんだよ」

「そのあと鬼教官に怒られるのとどっちがええねん」

「よし、行こう」

そう即答するナツ。そんなに嫌なんかい。そう思いながら廊下の窓をあける。

「よっしゃ、ほな背中につかまりや。転校生、お前も」

「え？何するの？」

「近道や。こっから飛び降りるぞ」

「え！？そんな！危ないよ！？」

「じゃかしいわ。早くしろや！ジャック・クリスピン曰く『時間を守れば身を守る』や！」

「え？誰、それ？」

「お前も知らんのかい。まあ、ええ。行くぞ！」

そう言つてシャルル・デュノアを抱きかかえ、背中にナツを背負い窓から飛び降りようとする。

「え、ちょ、ちよつと！？」

「しゃべんな。舌かむで」

窓枠に足をかけ飛び立つ。

「うおおおおつ！」

「ぎゃあああつ！」

三人分の体重は重いが重力変動を使い負担も軽減。元の体も強いから問題あらへん。うまいこと衝撃を吸収しながら着地する。

「ほいっと。無事着地成功」

「ふう、相変わらず心臓に悪いぜ。てかシャルル、お前女みたいな悲鳴上げてたな？」

「だ、だっていきなり飛ぶんだよ!?!そりゃ悲鳴もあげるよ!?!」

「ほら、二人とも。せっかくショートカットしたんやからちゃっちゃと行くで」

その声をかけ先に行く。

「あ、おい、蝉っ!ほら、行くぞ!シャルル」

二人も後を追って付いてくる。急いでアリーナに向かう。

「よーし、到着!」

ナツがそう叫ぶ。絡まれずに済み、ショートカットもしたので早めに着いた。

「ええからはよう着替え。遅れたらまたセンセに叩かれんで」

「そうだな。さっさと着替えるか」

そう言って一気にシャツを脱ぐナツ。ワイも脱いでいく。

「わあっ!?!」

「なんや?何を驚いとんねん。お前もさっさと着替えや。遅れてセンセに叩かれても知らんで」

「うちの担任はそりゃあ時間にうるさい人で

」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その、あっち向いてて……  
ね」

「男の着替えなんかに興味あるかいな」

そう言つてさつさと着替える。視線を感じるが気にしない。着替えは早くに終わるが髪が邪魔なので後ろで縛る。ついでにバンドナもきつく巻いておく。

「蝉つていつもバンドナつけてるけど外さないのか？それ絶対見えてないだろ」

「はずしても変わらんから大丈夫や」

「え、それって……」

「失明してるとでも思つといて」

もちろん真つ赤な嘘だが。学校側に許可は取つてあるらしいし問題はない。ただ今日の転校生と少しかぶっているような気がしないでもない。

「ま、先行くで。遅れなや」

「え、おい、ちょっと……」

話していたせいで着替えが遅れていたナツを置いていく。シャルル・

デュノアはちゃっかり着替えを終わらしていついてくる。

「えっと…、失明してるって本当？」

「嘘やけど？」

「えっ！？嘘って…」

「まあ、何かあるんやと思っという。人には聞かれないことが  
一つや二つあるやろ」

「…そうだね」

そう言っただけで黙る。やっぱり何か隠しとることがあるみたいや。そんな  
ことを思いながら第二グラウンドに到着。

だいぶ遅れてきたナツは案の定叩かれ、さらにそのナツとしゃべっ  
ていたセシリアと鈴も叩かれていた。

授業がいろいろあったが終わる。何かあったかは割愛したい。まあ、  
ナツがよくある少年漫画のシーンをほんとにやったり、セシリア  
と鈴が二人で山田センセに挑んだがあっさり負けたり、専用機持ち  
がISSの操縦を教えることになり一悶着があったりした。おもにナ  
ツのところだ。

「あー……。あんなに重いとは……」

「鍛え足りんのやないか？」

さっきの実習で使ったISの片付けのときのことをいつとるんやろう。まあ鍛えても意味のないワイが言ったところで説得力はないが。

「蝉はなんでそんなに元気なんだよ……」

「丈夫やからやな」

そう答える。基本的に体中が痛い以外は問題ないし。

「まあ、いいや。蝉、シャルル、着替えに行こうぜ。おれたちはまたアリーナの更衣室に行かないといけないしよ」

「え、ええつと……僕は機体の微調整をしてから行くから、先に行つて着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

「ん？いや、別に待つてても平気だぞ？俺は待つものには慣れ」

「ええやん。本人がええゆうてんやから。サッサ行くで」

そう言つてナツの襟をつかみ連れていく。必死に断るシャルル・デユノアを見て本当に女ではないかという疑問を強める。

「ま、それはないか……」

そうつぶやきグラウンドを後にする。

シャルル・デュノアの隠し事。気にはなるがどうするか。とりあえずさつさと着替えに行こう。相も変わらず体中が痛い。イライラや機嫌はだいぶマシやけどこれだけはどうにもならへん。

「ホンマ早くなんとかせなな」

そう思う。

第16話 転校生 ｝ d a i l y l i f e w h e n i t c h a n g e s

とりあえず何話か先まで出来てはいるけど、無理やり感が否めない  
ので推敲中。

あとリアルが忙しい。勉強とボランティアが大変…

時間はかかるかもしれませんが、週1で更新できるように頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9091s/>

---

IS ~ 蝉は飛ぶ ~

2011年6月8日19時46分発行